石　塚　遺　跡

ISIZUKA SITE

埋蔵文化財包蔵地緊急試・発掘調査報告書

—伊那中央病院建設事業—

2000

伊　那　市　教　育　委　員　会

伊那中央行政組合病院建設課

伊　那　市　土　地　開　発　公　社

石　塚　遺　跡

ISIZUKA SITE

埋蔵文化財包蔵地緊急試・発掘調査報告書

—伊那中央病院建設事業—

2000

伊 那 市 教 育 委 員 会

伊那中央行政組合病院建設課

伊 那 市 土 地 開 発 公 社

序

伊那中央病院建設敷地内に存在する石塚遺跡周辺では、耕作の折りに、数多くの遺物の出土例が古くより知られていました。大正末年に来伊した鳥居龍蔵博士がこの地域を綿密に踏査し、その調査結果を大著『先史及原史時代の上伊那』に掲載してあります。この書物の刊行によって、初めて、学問的な見地から石塚遺跡周辺の遺跡が注目を浴びるようになりました。

その後、この地域は全面的に、西天竜土地改良事業が導入され、一大水田地帯を形成しました。当時の水田造成事業は今日と違って、人力・牛馬による造成がすべてであったと聞き及んでいます。このことを踏まえてみると、遺跡自体の残存性は極めて高いと想定しながら、調査の方向へと足を向けたわけであります。

なにしろ、7haに及ぶ広大な面積、また、現況が水田との条件下のもとに、とりあえず、試掘調査を実施して遺跡の実態把握に努めました。

試掘調査は現場に霜柱が出来る頃、平成10年11月～12月にかけて、春の息吹が感じられる頃、平成11年3月の二回に分けて実施しました。その結果に基づいて、本格的な発掘調査を平成11年4月～6月にかけて行いました。その成果については本報告書に記述してありますから、お読み下さることを切に願うものであります。

試掘調査及び本格的な発掘調査を開始するに当たっては関係各位の並々ならぬ御協力のもとに極めて順調にことを進めていただき、また、現地作業を完了したあとの遺物・図面の整理、研究、報告書作製には、友野良一団長、調査員各位に御協力を願った。かくて、この事業が各位の絶大なる御協力によって今日の成果を得たことは誠に感激に堪えません。ここに心から感謝の意を捧げます。

平成12年1月

伊那市教育委員会

教育長　保　科　恭　治

まえがき（石塚遺跡の環境）

遺跡の位置

石塚遺跡は長野県伊那市御園、山寺両区の地籍に広く展開し、この一帯は両区の集落密集地帯より大分西へ隔たっている。本遺跡地には「小四郎窪」と呼ばれる小さい沢が東流し、これが先に述べた二つの区境となっている。西境は県道伊那・箕輪線（通称、春日街道）が南北に走り、これによって伊那市と南箕輪村との行政境を成している。

この辺で、遺跡地までに至る道順を案内申し上げる。概観的に見て、二つのルートが考えられる。その一つはJR飯田線伊那北駅を下車して、北へ向かって、県道南箕輪・沢渡線を約1㎞行くと信号機が設置されている大きな三叉路に突き当たる。ここは中央自動車道伊那インターへ連結するアクセス道路の最東端に当り、ここを左折して急勾配を登り詰め、2㎞程西へ行き、道路より南側の大きく開けた平坦地一帯が石塚遺跡である。

もう一つはJR伊那市駅で下車し、駅前、駅周辺に軒並ぶ通り町商店街を両側に見ながら、北へ300m程度進むと小沢川に至る。川を渡らずに、左折して、西へ数100m行き、室渡場（しっとば）橋を渡り、市道大萱・荒井線を西進して500m位で、四差路に直面し、ここを右折して、しばらく北へ行くと、右手に大きな近代的な建物が目にとまる。これは広域的な火葬場であるが、あまりにも立派なので、初めて見る人はただちに火葬場との判別が困難だと、多くの人々が意見を提言している。この施設を右手に見ながら北へしばらく進み、右手の眼下に開けた水田地帯が石塚遺跡の中心部である。

この一帯は大正末期に西天竜が通水が可能になった。このことが直接的な動機となって土地改良事業が施工され、現在のような美田の初源となったのである。

地形・地質

伊那市を包含する伊那谷の地形景観的な特色は東の南アルプス（別名、赤石山脈）、西の中央アルプス（別名、木曽山脈）に挟まれ、天竜川を主流とする造盆地状地形にある。この盆地状地形は南北に袋状の縦谷状を呈し、北の辰野から南の天竜峡まで約60㎞、幅4～10㎞にわたる平坦面を展開している。両アルプスの山裾、山麓に源を発する三峰川など大小様々な小河川が複雑多岐にわたる山麓扇状地、数段に及ぶ河岸段丘を形成しながら天竜川に注ぎ込み、いわば天竜川の支流的存在である。

天竜川を中心にして東側を竜東地区、西側を竜西地区と大別して呼んでいる。石塚遺跡周辺の地形的起因は小沢川によるところが極めて大と想定でき得よう。小沢川は木曽山脈系茶臼山の支流である南沢山と権兵衛峠を境にする経ヶ岳山系の沢水を集めて東流し、伊那市荒井区錦町付近で天竜川と合流する。

経ヶ岳山麓地域の地形面について　経ヶ岳山麓付近を扇頂にして複合扇状地が広範囲に及んでいる。この一帯には南から小沢川、大清水川、大泉川、帯無川、深沢川、桑沢川がそれぞれ東流して、最終的に天竜川に合流するこの一帯での扇状地地形面を大別すると次のようになる。

大泉面　経ヶ岳山麓扇状地一帯ではかなり大きな河川に大泉川があげられる。この川による大泉扇状地と南に隣接する大清水川扇状地との扇端部には小黒川活断層が南北に帯状に走向しており、この面を大泉面と呼んでいる。

神子柴面　この面は経ヶ岳山麓扇状地の中では最も広く分布している。組成の概要は次の通りである。三岳スコリア以新を乗せる神子柴段丘１と新期火山灰の最上部のみを乗せる神子柴面２に区分される。扇央地は大泉面・神子柴面１・神子柴面２と微妙に移行している。その位置は扇端部から約1.3km上流付近で、ここは旧春日街道とほぼ一致している。

新期扇状地面　これは山麓線から約１～1.5kmの間の山麓部に形成されている。全面には神子柴面より急な勾配となっている。また、西町断層の断層崖前面に形成されている。扇状地面には全面にわたって幾筋かの浅い谷が縞状に走り、前述した「小四郎窪」もこれらの一つに該当している。小黒川断層の崖面直下には多くの湧水群が確認されている。石塚遺跡付近での湧水群としては「今泉（いねずみ）」が上げられる。

経ヶ岳山麓地域の地質について　伊那谷盆地内の地層は扇状地を構成する砂礫層が主流で、粘土層、亜炭層、火山砕屑岩層は少ない。この状態は3頁の「伊那谷における地質層序表」を参照してください。発掘調査地点は上伊那北部扇状地帯に含まれ、その地質は、下位より「田畑礫層」「神子柴粘土層」「大泉礫層（下部・上部）」とさらに「新期テフラ」に分類される。これらの地層について注釈を加える。

田畑礫層　この礫層は上伊那北部地域では最下部層である。全体に岩層の変化に富み、全般的に赤褐色を呈している。２～３cm程度の円礫を主体として最大20cm大の大きさとなる。古い流向は天竜川と一致する。礫種は砂岩が多く、粘版岩、チャート、ホルンフェルスからなり、また、まれに細粒花崗岩や安山岩礫が混じる。

神子柴粘土層　田畑礫層を不整合に覆う厚さ約1.8ｍの粘土、シルトの細互層である。全体に暗黒色で、黄土色がかっている。下位の田畑礫層と同じく西に５°程度傾斜している。

大泉礫層　今回の発掘調査地点の扇状地を構成する礫層の総称である。すべて、木曽山脈から供給された亜角礫を主としており、しばしば火山灰を挟んでいる。この礫層は第１軽石層を境にして上部層と下部層に分類される。下部層は分布が限定されており、神子柴粘土層と不整合で一致し、同じ、粘土層を掘り込んでいる。さらに上部はシルト、粘土、第１軽石層に覆われている。

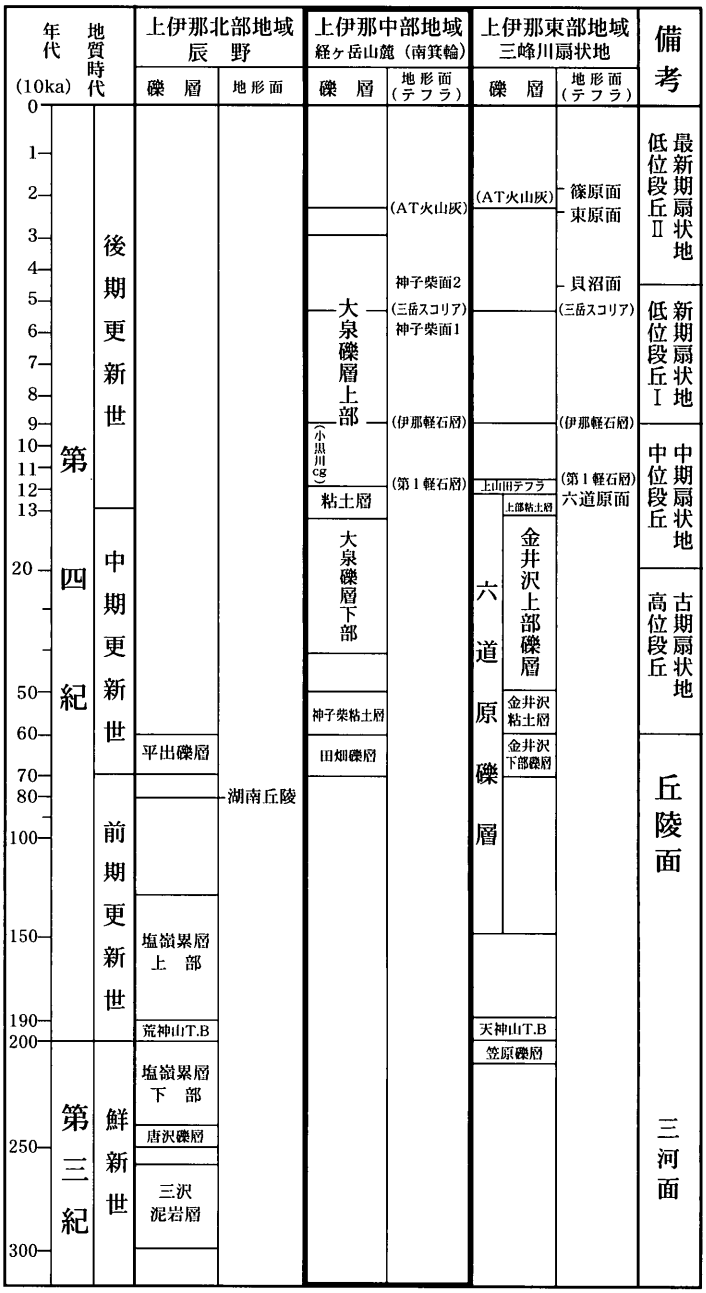
大泉層の骨格を成す礫は経ヶ岳山塊から供給された砂泥質岩や同質ホルンフェルスである。礫は亜角礫を主としているが亜円礫も混じっている。礫径は10cm以下を主とするが、まれに30cm大のものも含まれる。礫層下部では礫と粘土が互層する。礫層最上部は火山灰混じりの粘土層に変化している。

新期ローム層　層厚２～６ｍ、褐色を呈する御岳起源の火山灰である。

御岳火山を給源とするテフラ　伊那谷の盆地にはテフラが多く、また、厚く堆積している。これは通称、赤土と呼称され、親密度が高かった。さらに、古代より農業や生活に深く関わっていたし、扇状地や段丘を覆う堆積物として極、一般的になっている。

伊那谷盆地内に存在する礫層を覆っている風送風成型のテフラは御岳火山を給源としている。このテフラの中に南九州の蛤良火山を給源とする広域的なテフラがごくわずかに含まれている。新期御岳火山活動により、新期御岳下部テフラ層と新期御岳上部テフラ層を噴出させている。

伊那谷における地質層序表



伊那谷に一般的に堆積しているテフラ層は、新期御岳テフラの下部層と上部層である。この中で伊那谷に広く分布し、層が厚いため、指標テフラとして有効なのは下部テフラ層の第１軽石層と伊那軽石層であり、上部テフラ層の三岳スコリアである。

古期御岳火山活動は局所的な研究は進められているが、指標テフラとして使えるまでには、まだ、調査、研究が深まっていない段階である。

ボーリング調査結果　これについては４頁に土層柱状図として標示した。

標尺 (m)	標高 (m)	層厚 (m)	深度 (m)	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
	716.93	0.30	0.30		表土	暗褐			
1 2 3	713.93	3.00	3.30		ローム	茶褐		軟らかい	全体的に粒子組織は均質。 粘性は中位で含水は少量である。 スコリア、赤褐色土が点在する。
4	713.33	0.60	3.90		軽石	赤茶		非常に軟らかい	φ5～10㎜程度の軽石が主体で含水量は多く、黒色スコリアを含む。
5 6 7	710.03	3.30	7.20		粘土	褐		中位～非常に軟らかい	上部は粒子組織が均質、粘性は大きく、含水量は中位である。 赤褐色土、スコリアが混入する。 5.0～6.2m付近、白色・黒色土が多く混在する。 6.2～6.8m、細砂分が多くなる。
8	709.13	0.90	8.10		火山灰質粘土	乳白		非常に軟らかい	粘性は強く、含水量は多い。 スコリアが混入する。
9 10 11	706.33	2.80	10.90		粘土	褐～褐灰～褐		非常に軟らかい～軟らかい	粘性大きく、含水量は多い。 全体にスコリアを多く混入する。 9.0m付近より、白色粘土多く混入する。 10.5m付近より、礫を少量含む。
					粘土混合砂礫	暗灰		非常に密	φ20～70㎜の亜角礫、亜円礫が主体となる。

土層柱状図

歴史的環境

伊那市地域内で、伊那西部と呼ばれている地区では現在、確認されている埋蔵文化財包蔵地、いわゆる遺跡は75カ所に及んでいる。遺跡の分布、立地については伊那西部地区遺跡分布図を、遺跡の時代的区分については伊那西部地区遺跡一覧を参照すること。遺跡の所在地点に関して、一目で判別できることは、75カ所の遺跡がただ漠然的に分布していないことが注目に値する第一点である。遺跡の所在地点は次のように三分類に大別可能である。その一つは山麓扇状地の扇頂部面、扇側部面。もう一つは天竜川の支流である小黒川、小沢川、大清水川、大泉川の両岸の段丘面。さらにもう一つは天竜川の支流、天竜川によっての山麓扇状地末端部面（学名：扇端部面）に形成された河岸段丘面。

これらの遺跡を垂直分布面で概観すると、標高650m位から950m位にふくまれ、パノラマ状的に理解できる。前述した三分類が可能な必須条件はあくまでも水便の問題である。

伊那西部地区75遺跡の時代的な内訳は旧石器を出すもの６、縄文草創期２、縄文早期３、縄文前期10、縄文中期60、縄文後期６、縄文晩期２、弥生前期１、弥生中期１、弥生後期６、古墳３、奈良・平安時代の土師器を内包するもの26、同じく須恵器を内包するもの29、灰釉陶器を包含するもの21、さらに、緑釉陶器を包含するもの２、中世陶磁器などを包含するもの12、近世として月見松経塚がある。これらのうち何らかの理由で発掘調査を実施した遺跡は遺跡番号２の北割、４の古屋敷、５の金鋳場、６の財木、10の大菅西、19の桜畑、23の天庄２、28の宮垣外、29の堀の内、31の小花岡、32の中の原、34の与地原、37の八人塚、38のおぐし沢、39の丸山清水、42の船窪、46の城畑、47のますみヶ丘、48の赤坂、49の伊勢並、51の狐塚南古墳、53の山の神、54の小黒南原、56の城楽、57の小沢原、59の月見松経塚、60の月見松、62の上の山、63の高尾、64の鳥居原、65の今泉、72の牧ヶ原、74の山本田代などがある。先に述べたように三タイプのグループを論じたが、それぞれについて概観しておく。

山麓帯遺跡群　この分類の仕方は山麓扇状地の扇頂部から扇測部周辺に展開している遺跡群を指して、このように呼ぶことにした。この一帯は山峰部分が終わって、水便、日当りがともに良好で、居住するには好適地に該当する。

支流両岸遺跡群　この分類の仕方は天竜川に注ぎ込む小黒川、小沢川、大清水川、大泉川などの両岸に形成された小規模の段丘面、または川に面した傾斜面に立地している遺跡群を指しているので、このように呼ぶことにした。この一帯のどこかに古代「令制東山道」の渡河点が存在していたわけであるが、明確な地点は把握されてなく、推定での時点で議論を呼んでいる。

段丘遺跡群　経ヶ岳山麓より東へ向かって緩傾斜に広く展開している複合扇状地の扇端部、つまり、段丘形成に天竜川が大きく左右した位置に点在している遺跡群を指している。この一帯は豊富な湧水があり、養鱒場やワサビ栽培が盛んである。この一帯の西端部に小黒川活断層が南北に走行している。

（飯塚　政美）

伊那西部地区遺跡分布図（1：50,000）

伊那西部地区遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代			古墳時代		奈良平安時代				中世	備考（長野県遺跡地図番号）
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	土	須	灰	緑	陶磁	
1	石塚	伊那御園・山寺					○								○	○	○			
2	北割	西箕輪羽広					○													(2602)
3	田代	〃					○					○								(2601)
4	古屋敷	〃					○					○								(2600)
5	金鋳場	〃					○								○	○	○	○	○	(2599)
6	財木	〃					○	○	○						○	○	○		○	
7	蔵鹿山麓	〃	○																	
8	経ヶ岳山麓	〃																	○	和鏡
9	西箕輪小学校	〃													○					
10	大萱西	大萱	○				○													
11	西箕輪養護学校	〃	○																	
12	熊野神社	〃 8274					○									○	○			(8678)
13	富士塚	〃										○			○	○	○			(2603)
14	在家	7438～7444外					○													(8679)
15	高根	大泉新田					○													
16	久保畑	〃					○									○				
17	塚畑高根	〃					○									○				
18	中道南	吹上					○													
19	桜畑	〃					○													
20	殿屋敷	梨の木					○								○	○				(2608)
21	天庄1	上戸					○								○	○				(2606)
22	上戸	〃					○													
23	天庄2	〃					○													
24	溝畑	〃													○	○				
25	下の原	〃					○													
26	堂洞	〃													○	○				
27	富士垣外	中条					○													
28	宮垣外	〃					○	○							○	○	○	○		(2607)
29	堀の内	〃					○													
30	上の原	〃													○	○				
31	小花岡	花岡					○	○							○	○				(2605)
32	中の原	中原					○					○								(2604)
33	与地山寺	与地					○													
34	与地原	〃					○													(2609)
35	北方	伊那横山					○													
36	矢塚畑	〃					○													
37	八人塚	〃					○													(2370)
38	おぐし沢	〃					○													
39	丸山清水	平沢					○													(2369)

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代			古墳時代		奈良平安時代				中世	備考（長野県遺跡地図番号）
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	土	須	灰	緑	陶磁	
40	穴沢	伊那平沢					○													(2371)
41	ますみヶ丘上	ますみヶ丘					○									○	○		○	
42	船窪	〃 船窪				○	○									○	○		○	(2773)
43	鼠平2	西町大坊					○								○	○	○			(7264)
44	鼠平1	〃	○				○		○			○								(2372)
45	上手原	〃					○													
46	城畑	〃				○	○								○	○	○		○	住居址 (2378)
47	ますみヶ丘	〃 小黒原218-7外					○													中央道 (8664)
48	赤坂	〃 722-7-1585外					○													〃 (8665)
49	伊勢並	〃	○		○	○	○	○			○			○	○	○	○			住居址10 (2374)
50	八人塚古墳	〃 7360-1																		径20m×高2m 刀・鉄鏃・玉 6m×1.2m・高1.2m 横穴式石室 (2375)
51	狐塚南古墳	〃 7327-外																		径24m×高2m 土盛円墳 (2367)
52	狐塚北古墳	〃 7326-外																		径14.5m×高3m 土盛円墳 (2366)
53	山の神	〃 8964-外			○	○	○								○	○	○		○	(2377・2379)
54	小黒南原	〃 7349-外					○													中央道 (2376)
55	富士塚	〃					○								○				○	径8m×高2m 土盛円墳
56	城楽	〃 小黒原小沢 725-1 4543-3外				○	○	○							○	○	○		○	(2365)
57	小沢原	小沢					○			○										
58	小沢神社	〃					○													中央道
59	月見松経塚	〃 8069-外																	○	径8m×高1m 土盛・中世館址 (2368)
60	月見松	〃 8069-5外	○	○		○	○								○	○	○		○	住居址4 (2364)
61	ウグイス原団地	城南町													○	○	○			
62	上の山	荒井西													○	○	○			住居址1
63	高尾	高尾町2524-2外				○	○													
64	鳥居原	上村					○								○	○	○			
65	今泉	〃			○	○	○	○							○	○	○			
66	原垣外	〃				○									○	○	○			
67	かんぜん	〃					○													
68	御園東部	御園東部					○													
69	御園南部	南部					○								○	○	○			
70	宮ノ前	〃 653-1・727外				○	○													
71	清水洞	駒見町					○													
72	牧ヶ原	〃		○			○					○								
73	大清水	〃					○													
74	山本田代	西春近山本 1393-イ 1394外					○								○	○	○		○	中央道
75	関畑	伊那横山					○													
		合計	6	2	3	10	60	6	2	1	1	6		1	26	29	21	2	12	

例　言

1．本書は、伊那中央病院建設事業に伴う緊急試掘調査（平成10年度実施）、緊急発掘調査（平成11年度実施）を合冊にした埋蔵文化財緊急試・発掘調査報告書である。

2．この緊急試掘調査、緊急発掘調査は伊那中央行政組合組合長の委託により、伊那市教育委員会が遺跡試・発掘調査団を編成し、それに事業を委託して実施した。

3．本調査は、平成11年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

4．本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

本田秀明　　飯塚政美

◎図版作製者

・遺構及び地形実測図　　友野良一　　本田秀明　　飯塚政美　　高松慎一

・土器及び陶器実測図　　本田秀明

・土器拓影　　本田秀明

・鉄器実測図　　本田秀明

◎写真撮影者

・発掘及び遺構　　友野良一　　飯塚政美

・遺　　物　　友野良一　　飯塚政美

5．本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

6．出土遺物、遺構図及び実測図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

石塚遺跡（試掘調査）

目　　次

目　　次

図版目次

第Ⅰ章　試掘調査の経過…… 4

第１節　試掘調査に至るまでの経緯…… 4

第２節　試掘調査の組織…… 4

第３節　試掘調査日誌…… 5

第Ⅱ章　試掘調査…… 8

第１節　試掘調査の概要…… 8

第Ⅲ章　所　　見…… 8

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景及び試掘坑状況

図版２　遺跡遠景及び試掘坑状況

図版３　遺跡遠景及び試掘坑状況

第Ⅰ章　試掘調査の経過

第１節　試掘調査に至るまでの経緯

今回、試掘調査の対象となった石塚遺跡は伊那中央病院建設事業に伴う緊急試掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記しておくことにする。

平成10年10月５日付けで、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の２第１項の規定による）を提出する。

平成10年11月２日付けで、伊那中央行政組合組合長小坂樫男と市内遺跡（石塚遺跡他）試掘調査団団長友野良一両者間で埋蔵文化財包蔵地試掘調査委託契約書を取りかわす。

平成11年３月10日付けで、前述した両者間で変更委託契約書を締結する。

平成11年３月25日付けで、石塚遺跡試掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

第２節　試掘調査の組織

緊急試掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長	小田切　仁	
委員長代理	小坂栄一	
委員	岸　敏子	
〃	小松光男	
教育長	保科恭治	
教育次長	柘植　晃	
事務局	酒井俊彦	（社会教育課長）
〃	伊藤初美	（社会教育課長補佐　女性室長）
〃	白鳥今朝昭	（社会教育係長）
〃	矢沢謙一	（社会教育青少年係長）
〃	飯塚政美	（社会教育係）
〃	牧田としみ	（　〃　）
〃	高松慎一	（　〃　）

試掘調査団

団長	友野良一	（日本考古学協会会員）
調査員	飯塚政美	（　〃　）

調　査　員　　本　田　秀　明（長野県考古学会会員）
　　〃　　高　松　慎　一（上伊那郷土研究会会員）
作　業　員　　城倉三成　那須野進　蟹沢光貞　小沢邦男　有賀秀子　酒井とし子
　　名和善兵　大久保富美子　水野弘　守屋哲治　酒井公士郎　松下末春
　　辰野隆夫　小田切守正（敬称略順不同）

第３節　試掘調査日誌

平成10年11月19日　発掘器材、測量器材の整備をする。

平成10年11月20日　前日と同様の作業を実施する。

平成10年11月24日　発掘器材、測量器材の綿密なる整備を実施する。

平成10年11月25日　発掘器材、測量器材の発掘現場への運搬、スペースハウス、コンテナハウス、トイレを設置する。グリッドを10ｍ方眼に組み込む。

平成10年11月26日　グリッドを設定する。10ｍ間隔で一辺が２ｍ×２ｍ、面積４㎡の試掘坑を規則的に作り上げる。

平成10年11月27日　試掘を開始するが、遺構、遺物の検出は全く無かった。本日一杯かかって一枚目の水田の試掘調査終了。地層は上から耕土層、水田の地場層、ソフトテフラ層、ハードテフラ層の層序で堆積しており、ハードテフラ層に達するまでに約50～80㎝であった。

平成10年11月30日　試掘坑を東、東へと掘り進めるが、遺構、遺物の検出は全く無かった。

平成10年12月１日　前日と同様な作業を実施してみた結果、その状態は前日と同じであった。

平成10年12月２日　前日と同じ作業を実施する。

平成10年12月３日　試掘坑の一隅に黒い落ち込みが発見され、周辺を拡張すると隅丸方形状の竪穴住居址となり、これを第１号住居址と命名し、正確なるプラン確認に努めると、平安時代の土師器が出土し、従って同時代の住居址と判明した。今回はあくまでも試掘調査だけであるのでそのままにしてシートを遺構全体に覆い被せておく。

平成10年12月４日　試掘坑を細かく東へ向かって掘り進めていくが、遺構、遺物の検出は何も無かった。

平成10年12月７日　作業を開始したら、すぐに雨が降ってきたので、作業を午前10時に終了する。

平成10年12月８日　試掘坑の一隅に柱穴列が発見され、その周辺を広げる。引き続いて隅丸方形状の竪穴住居址が検出され、これを第２号住居址と名付け、本発掘調査に向けてシートを掛けて保存しておく措置を講じた。

平成10年12月９日　試掘坑を掘り進めていくと新たに住居址が一軒発見され、第３号住居址と名付けて、第１号住居址、第２号住居址同様にシートを厚く掛けておく。

平成10年12月10日　試掘坑をどんどん東へ進行していくが、遺構、遺物の検出は何も無かった。

平成10年12月11日　前日と同様な作業を実施するが、試掘結果はかんばしく無かった。

平成10年12月14日　前日と同じ作業。

平成10年12月15日　バックフォーにて試掘坑を掘り進める。本日の作業は耕土剥ぎが主流であった。

平成10年12月16日　東、東へと試掘坑をあけるが、遺構、遺物の検出は何も無かった。

平成10年12月17日　試掘坑を水路を隔てた南側、東側より西へ向かって掘り進めるが、その結果については前日と同様であった。

平成10年12月18日　試掘坑を南北に走る道路の西側へ入れるが、遺構、遺物の検出は何も無かった。

平成10年12月21日　前日と同じ作業。結果も同じであった。

平成10年12月22日　試掘した坑を『本発掘調査報告書』に掲載した第1図 地形及び試掘坑・遺構配置図に図示する。試掘坑を西側へ進める。

平成10年12月24日　試掘調査で検出された遺構に冬場を無事に越せるように幾重にもシートを覆い被せる。発掘器材、測量器材の後片付けを実施する。

平成10年12月25日　本日をもって試掘調査を終了する。発掘器材を丁寧に洗い、収納する。

平成11年3月9日　伊那市考古資料館前庭にて発掘器材の整備及び点検を実施する。この作業終了後、これら一式を発掘現場へ運搬する。スペースハウス、コンテナハウスを現場へ建てる。グリッドを設定する。

平成11年3月11日　本日より本格的な試掘調査を実施する。グリッド掘りを進めるが、遺構、遺物の検出は何も無かった。

平成11年3月12日　北風の強い一日であった。小四郎窪の北側へグリッドを入れるが、遺構、遺物の検出は何も無かった。

平成11年3月17日　本日は久しぶりに晴天で、しかも、暖かく、すごしやすい一日であった。グリッド掘りを東へ、東へと掘り進めるが、遺構、遺物の検出は何も無かった。

平成11年3月18日　昨日と同様な作業を進行するが、何の成果も無かった。

平成11年3月19日～3月29日まで　試掘坑の埋め戻しをブルトーザーとバックフォーを併用して実施する。

（飯塚政美）

試掘風景

試掘風景

試掘風景

第Ⅱ章　試掘調査

第１節　試掘調査の概要

今回の試掘調査地区は「小四郎窪」の両岸一帯、ようするに、伊那中央総合病院建設敷地内に該当していた。この一帯は前述したように大正末年頃に西天竜井筋を開削し、それに付随するように、大規模な西天竜土地改良事業を実施して、一大穀倉地帯を作り上げた経緯は明瞭である。当時は、まだ土木技術、土木機械が発達しておらず、人の作業による水田造成が主流であった。したがって、現在のような大幅な土量の移動はされずに、小規模的な土量の移動だけに留まっていた。その顕著な事例は水田自体が畦畔を含めて、１反歩区画の土地基盤が成し遂げられている点である。敷地内の大部分は水田に、「小四郎窪」両岸の傾斜面は野菜畑にそれぞれ有効利用され、徐々にではあるが、宅地化が波及してきている。

詳細な試掘調査方法は『本発掘調査報告書』第１図　地形及び試掘坑・遺構配置図を参照すること。

遺構の検出された一帯は上から耕作土、水田の地場層、褐色土層、ソフトテフラ層、ハードテフラ層の順に層序が単純に堆積していた。よって、遺構の検出は割合に安易であった。遺構・遺物の詳細な説明は本発掘調査報告書の方に譲ることにする。

第Ⅲ章　所　　見

試掘調査の結果、検出された遺構・遺物は前節で述べた通りである。当初、期待していた程の成果はあがらなかった。結論的に考えてみると、遺跡地の中央部付近を西から東へ流れる「小四郎窪」の湧水状態によって、遺構濃密度の割合が左右されると言っても過言ではない。このことを踏まえて考えてみると先史地理学ブラーシュがかつて提唱した「水の無いところには集落が存在しない」との説が思い出される。

ようするに、「小四郎窪」の湧水量は極めて少なく、湧水があったにしても一時的ではなかったかと思われる。　（飯塚政美）

図　　版

図版1　遺跡遠景及び試掘坑状況

遺跡地を南から見た試掘坑状況

遺跡地を東から見た試掘坑状況

図版2　遺跡遠景及び試掘坑状況

遺跡地を南東から見た試掘坑状況

遺跡地を西から見た試掘坑状況

図版3　遺跡遠景及び試掘坑状況

遺跡地を西から見た試掘坑状況

遺跡地を西から見た試掘坑状況

報告書抄録

ふりがな	いしづかいせき
書名	石塚遺跡
副書名	伊那中央病院建設事業
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書
編著者名	友野良一　飯塚政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地　TEL0265－78－4111
発行年月日	西暦2000年1月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
いしづか 石塚	ながのけん いなし 長野県 伊那市 いな みその やまでら 伊那 御園・山寺	伊那市	40			平成10年 11月19日 ～ 平成11年 3月18日	40,000	伊那中央病院建設事業に伴う試掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石塚	集落址	平安時代	竪穴住居址　3軒		石塚遺跡は小四郎窪という小さな川の両岸に展開している。伊那中央病院敷地内は大正末年頃に実施された西天竜土地改良事業によって、あたり一面は水田化している。従って、遺物の表面採集は不可能であった。試掘調査によって、平安時代の竪穴住居址3軒と、それに付随した竈の存在があった。

石 塚 遺 跡（発掘調査）

目　　次

目　　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過…… 5
第１節　発掘調査に至るまでの経緯…… 5
第２節　発掘調査の組織…… 5
第３節　発掘調査日誌…… 6

第Ⅱ章　発掘調査…… 9
第１節　調査の概要…… 9
第２節　遺構と遺物…… 9
(1) 縄文時代の遺構と遺物…… 9
(2) 平安時代の遺構と遺物…… 10
(3) 時期不詳の遺構…… 20

第Ⅲ章　所　　見…… 28

挿　図　目　次

第１図　地形及び試掘坑・遺構配置図……（袋中）
第２図　縄文土器拓影……9
第３図　第１号住居址実測図・第1号住居址竈断面図（左下）……11
第４図　第１号住居址出土遺物分布図……12
第５図　第１号住居址出土遺物実測図……12
第６図　第２号住居址・第2号竪穴実測図・第2号住居址竈断面図（左下）…13
第７図　第２号住居址出土遺物分布図……14
第８図　第２号住居址出土遺物実測図……14
第９図　第３号住居址・第1号竪穴実測図・第3号住居址竈断面図（左下）…15
第10図　第３号住居址出土遺物分布図……16
第11図　第３号住居址出土遺物実測図……17
第12図　第４号住居址実測図・第4号住居址竈断面図（左下）……18
第13図　第４号住居址出土遺物分布図……19
第14図　第４号住居址出土遺物実測図……19
第15図　第１号柱穴群実測図……20
第16図　第２号柱穴群実測図……23
第17図　第１号溝状遺構実測図……25
第18図　第１号集石遺構実測図……27

図　版　目　次

図版１　遺　　構
図版２　遺　　構
図版３　遺　　構
図版４　遺　　構
図版５　遺　　構
図版６　遺物出土状況
図版７　遺物出土状況
図版８　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった石塚遺跡は伊那中央病院建設事業に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記しておくことにする。調査方針は平成10年度に実施した試掘調査によっている。

平成11年4月1日付けで、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の2第1項の規定による）を提出する。

平成11年4月2日付けで、伊那中央行政組合組合長小坂樫男と市内遺跡（石塚遺跡他）試・発掘調査団団長友野良一両者間で埋蔵文化財包蔵地試・発掘調査委託契約書を取り交わす。

平成11年6月7日付けで、石塚遺跡発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成11年6月7日付けで、石塚遺跡発掘調査出土埋蔵文化財の拾得についてを伊那警察署長宛に提出する。

平成11年6月7日付けで、石塚遺跡発掘調査出土埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

第２節　発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長	小田切　仁	
委員長代理	小坂栄一	
委員	岸　敏子	
〃	小松光男	
教育長	保科恭治	
教育次長	唐沢　勇	
事務局	酒井俊彦	（社会教育課長）
〃	伊藤初美	（社会教育課長補佐　女性室長）
〃	白鳥今朝昭	（社会教育係長）
〃	矢沢謙一	（社会教育青少年係長）
〃	飯塚政美	（社会教育係）
〃	牧田としみ	（　〃　）
〃	高松慎一	（　〃　）

発掘調査団

団　　長	友　野　良　一	（日本考古学協会会員）
調　査　員	飯　塚　政　美	（　　〃　　）
調　査　員	本　田　秀　明	（長野県考古学会会員）
〃	高　松　慎　一	（上伊那郷土研究会会員）
作　業　員	城倉三成　那須野進　小沢邦男　織井和美　蟹沢光貞　有賀秀子 名和善兵　酒井とし子　大久保富美子　水野弘　辰野隆夫　酒井公士郎 松下末春　小田切守正（敬称略順不同）	

第３節　発掘調査日誌

平成11年４月２日　グリット掘りを進めるが、遺構・遺物の検出は何も無かった。午後になって雨が降り出しために、作業を中止する。

平成11年４月５日　前日と同様の作業を進めていくと、柱穴群の存在があった。

平成11年４月６日　第１号集石の調査を開始する。この遺構を掘り下げて、石の洗浄を進める。一部、埋め戻しを実施するが、午後３時頃に雨が降ってきたので、この時点で作業を中止する。

平成11年４月８日　第１号集石遺構の写真撮影及び平面の実測。埋め戻し作業を進行する。

平成11年４月９日　第１号集石遺構の平面実測。埋め戻し作業の続行。本日をもって小四郎窪の北側に展開している御園地籍の埋め戻しを完了する。

平成11年４月12日　第１号集石遺構の平面実測。小四郎窪の南側、山寺地籍の一角にスペースハウス、コンテナハウス、簡易トイレを設置する。平成10年度実施の試掘調査によって検出された住居址の調査に取りかかる。住居址番号は試掘時に採用したのをそのまま用いることにした。

第３号住居址のプランを確認して、掘り始める。掘り下げていくと、相当量の灰釉陶器片及び完形の灰釉陶器皿、鉄製の紡錘車がそれぞれ出土。第１号住居址、第２号住居址のプラン周辺を拡張する。

平成11年４月14日　第１号集石遺構の断面実測終了。同じく断面の写真撮影終了。第２号住居址、第３号住居址はベルトを東西に残し、そのほか、住居址の空間部分の掘り下げをほぼ完了する。第１号住居址のプランを確認する。

平成11年４月15日　第１号集石遺構底部の写真撮影、これの底部に大きな石を同一レベルで敷いてあった。底部、壁面の平面、断面実測終了。第１号集石遺構の間から焼土、木炭片が出土。第１号住居址の掘り下げを進める。柱穴群の拡張を進め、その広がりを把握する。

平成11年４月16日　第１号住居址のベルトを残して、ほぼ掘り下げを完了する。柱穴群の範囲確認につとめる。グリット掘りを続行する。

平成11年４月20日　第１号住居址、第２号住居址、第３号住居址のセクション図の完成。南側の水田地場の下層に方形の黒い落ち込みが見られ、これを第４号住居址と命名し、ベルトを残して掘り下げを開始する。この住居址から灰釉陶器片が出土し、平安時代の住居址と判明した。西へ、西へとグリット掘りを続ける。

平成11年４月22日　第１号住居址、第２号住居址、第３号住居址のセクションベルトを取り除く。第４号住居址セクションベルトの地層断面図を作製する。この作業終了後にベルトを取り除く。

平成11年４月23日　グリット掘りを西へ、西へと掘り進める。午後３時頃より雨降りとなり、それ以後、作業を中止する。

平成11年４月26日　前日と同様な作業を実施する。

平成11年４月27日　第２号住居址、第４号住居址の遺物ドットマップ図の作製。

平成11年４月28日　発掘器材の破損が甚だしいので、それの点検、整備を行う。

平成11年５月６日　第１号住居址、第３号住居址出土遺物ドットマップ図の作製。グリット掘りが西側へ順調に運んでいる。

平成11年５月７日　グリット掘りを西側へ進める。柱穴群のセクション図を完成する。

平成11年５月10日　第１号住居址、第２号住居址、第３号住居址の清掃をして、写真撮影を終える。

平成11年５月11日　第４号住居址の清掃を実施して、写真撮影を済ませる。

平成11年５月12日　第１号住居址の平面、断面実測を終了して、第２号住居址の平面実測の一部を済ませる。グリット掘りを西へ、西へと進める。

平成11年５月13日　第１号竪穴、第２号竪穴、第３号住居址、第２号住居址の平面実測、断面実測終了。グリット掘りを西側へ進める。

平成11年５月14日　第４号住居址の平面実測、断面実測終了。埋め戻しを開始する。

平成11年５月17日　柱穴群の平面実測、断面実測終了。グリットの埋め戻し。

平成11年５月18日　第２号柱穴群の平面実測、断面実測終了。グリットの埋め戻し。

平成11年５月20日　グリットの埋め戻し。

平成11年５月24日　グリットの埋め戻し。午前10時頃より雨降りとなり、作業中止。

平成11年５月26日　グリットの埋め戻し。

平成11年５月28日　重機にてグリットの埋め戻しの後に人力にて手直しする。

平成11年５月31日　第２号柱穴群、第１号溝状遺構の清掃及び写真撮影を済ませる。グリットの埋め戻し。

平成11年６月１日　第１号溝状遺構の平面実測、グリットの埋め戻し。

平成11年６月２日　第１号溝状遺構の平面実測、第１号住居址竈、第２号住居址竈、第３号住居址竈、それぞれのカッテングを実施する。グリットの埋め戻し。

平成11年６月３日　第４号住居址竈のカッテングの実施。グリットの埋め戻し。第１号住

居址竈、第２号住居址竈、第３号住居址竈の実測を終える。

平成11年６月４日　第４号住居址竈の実測を済ませる。グリットの埋め戻し。発掘現場の後片付けを終えて、発掘器材一切を伊那市考古資料館へ運搬する。

平成11年６月～平成11年12月　遺物の整理、遺物の実測、図版の作製、写真撮影、報告書を印刷所へ送る。

平成12年１月　報告書の校正、報告書の刊行。　（飯塚政美）

発掘風景（第２号住居址）

発掘風景（第１号住居址）

発掘風景

発掘風景

発掘風景

発掘風景

第Ⅱ章　発掘調査

第１節　調査の概要

石塚遺跡周辺の現況農用地の利用状況は試掘調査報告書の通りである。水田地帯の耕作土は丁寧に深耕がくり返されているために、有機質分を多量に含んでおり、強い黒味を帯びていた。これらを踏まえて、重機による耕土剥ぎを実施する。

調査結果は発掘調査報告書の通りであり、これら、それぞれの遺構に伴って相当量の遺物が出土した。

遺物のうち、土器・陶器に限定して見る。特に土器については編年的による追求をこころみると縄文中期前葉の梨久保式、縄文中期中葉の井戸尻式、縄文中期後葉の曽利式であった。土師器に関しては全て平安時代中期に含まれており、それらに伴出して、須恵器・灰釉陶器が出土している。特殊な遺物として、鉄製紡錘車の検出があった。

第2節　遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構と遺物

第1号竪穴（第9図　図版1）

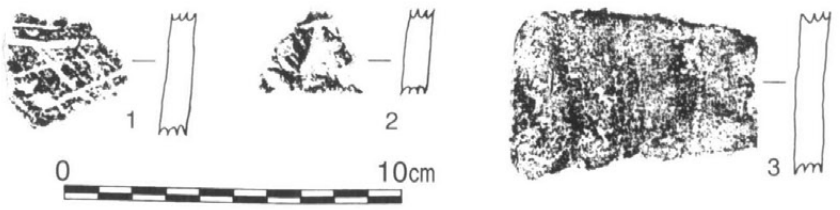
本竪穴は第３号住居址の北西隅に検出された。第３号住居址を発掘している時点では、この一部分は貼り床状を呈しており、これを取り除いた後に、第１号竪穴が発見されたかっこうになる。南北1m10cm位、東西1m位の規模を有し、部分的に凹凸は見られるが、平面プランは大般、円形状と判別してもよかろう。壁高は40cm位を測定でき、やや内弯気味を呈する。床面は概ね、平坦で、極めて堅い叩きを成していた。

本竪穴より、縄文中期前葉の土器片が床面直上より２片出土しており、よって、この時期の遺構と想定される。

遺物（第2図）

第２図に掲載した土器は３片とも第１号竪穴より出土しているが、(1～2) は床面直上、(3) は覆土上層とその出土層面に大差がある。時期決定に採用できる土器片は当然ながら（1～２）に限定され、(3) は後の飛び込みの可能性が強い。

（1～2）は深い細沈線を交叉状に施してある。色調は黒褐色（1）、赤褐色（2）を呈し、焼成はともに良好、かなりの量の雲母粒、長石粒を含む。



第２図　縄文土器拓影（1～2 第１号竪穴床面直上　3 第１号竪穴覆土上層）

(1～2) は縄文中期前葉に中央高地を中心にして隆盛を誇った梨久保式の一派と思われる。
(3) は深鉢型土器の胴部破片であり、中厚手に属する。無文地が全面に及んでいるが、外器面が剥落したと見えて、胎土中の長石粒や雲母粒が露出状態を呈し、ザラザラしている。赤褐色を呈し、焼成は中位である。縄文中期後葉の曽利式の新しい方に属すると思われる。

第2号竪穴（第6図　図版1）

本竪穴は第２号住居址の北東隅に検出された。第２号住居址を掘り下げていく段階では本遺構は確認できずに、第２号住居址のP1を精査中に発見された。したがって、第２号住居址は第２号竪穴に貼床をして床面を構築してある状態となる。南北1m70cm程度、東西1m25cm程度の規模をそれぞれ持ち、円形状の平面プランを呈する。

壁高は40cm程度で、やや内弯気味を呈し、全般的に断面はやや摺鉢状を呈するスタイルとなる。壁面は堅く、凹凸が多い。床面は凹凸が多めで、堅い。遺物の出土はないが、第１号竪穴の状態に類似している点からみて、縄文中期の所産と思われる。

(2) 平安時代の遺構と遺物

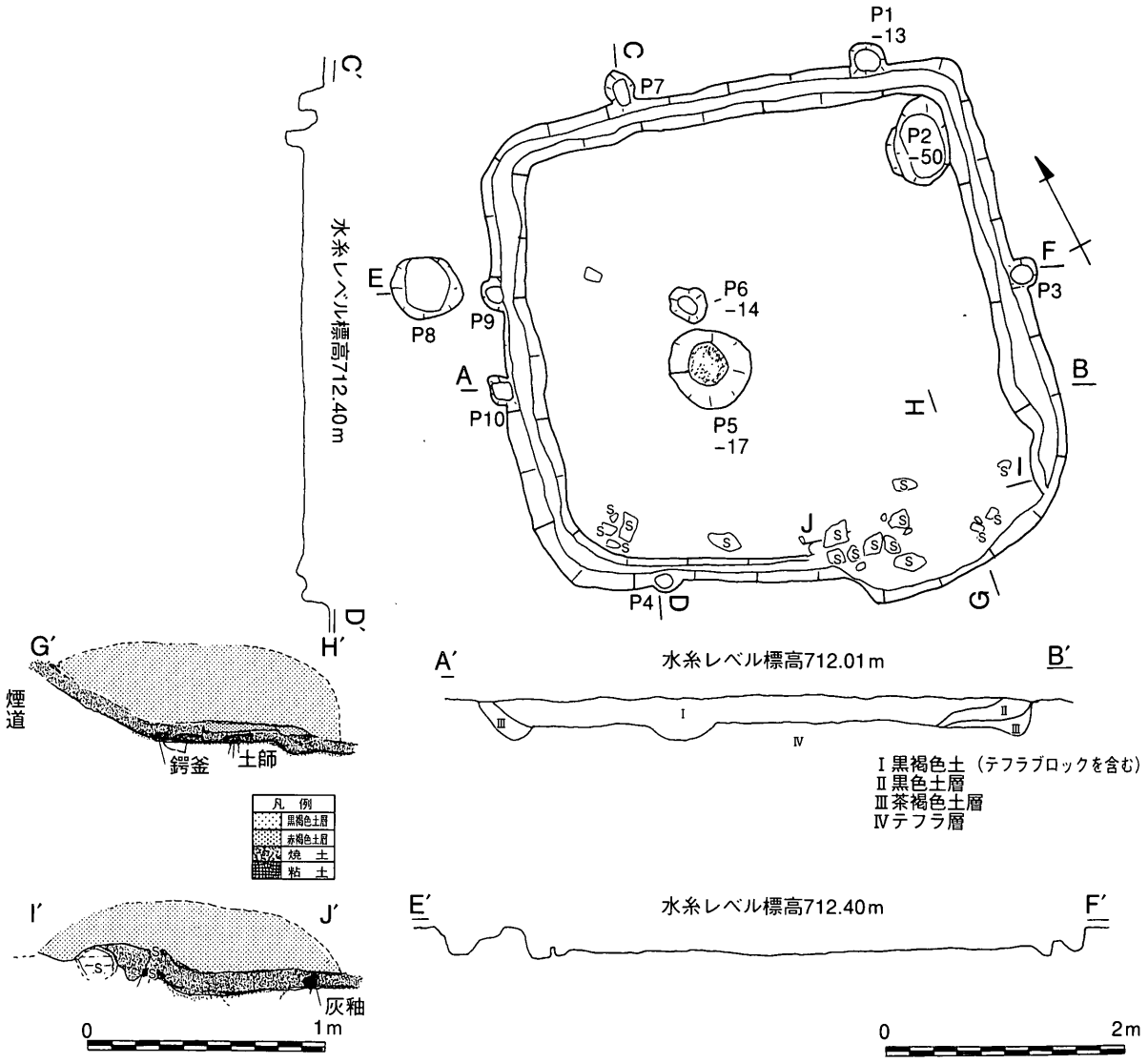
第1号住居址（第3～4図　図版2～3）

本址は石塚遺跡の中央部付近を東流する「小四郎窪」の南側に単独な姿で検出され、東側に近接して第２号住居址が存在している。表土面より40cm位下ったソフトテフラ層を見事に掘り込んで構築した隅丸方形状の竪穴住居址である。規模は南北4m40cm位、東西4m50cm位の数値を測定できる。

壁高は南側で10cm程度と浅く、西側の最後部でも30cm程度と、全般的に見て、低い数値であった。構築時はもっと高かったと察せられるが、水田造成時に削り取られ、現在のような状態になったものと思われる。壁面は若干の凹凸はあったが、垂直に近似した状況下と考えてもよかろう。床面は堅い叩きでつくられており、大般平坦ではあったが、ところどころにブロック状に凹凸を認めた。南東隅の竈が構築されている以外には、壁面直下に周溝が美しく全周しており、住居址としてのイメージが沸いてくる。周溝の底面は堅く、凹凸は顕著であり、それの数値は幅30cm前後、深さ10cm～20cm程度とバラツキがあった。

柱穴は大小さまざま10ヶ所検出されたが、主柱穴になりそうなのはP2、P8であり、北壁に接してあるP1、P7、東壁に接してあるP3、南壁に接してあるP4、西壁に接してあるP9、P10らはその配列位置からして母屋柱的な柱穴と想定される。P5は覆土中に多量の焼土が充満しており、いわば竈の灰捨場的機能を果たしていたと思われる。

竈は南東壁に沿って構築され、南北1m10cm程度、東西1m30cm程度の規模を持し、その組成は石組粘土竈であった。竈の残存状態は極めて悪く、残されていた硬砂岩や粘板岩は赤く焼けて変色し、幾筋もの亀裂痕が混入していた。



第３図　第１号住居址実測図・第１号住居址竈断面図（左下）

遺物は土師器、灰釉陶器が主流を成して出土し、それらの編年からみて、11世紀代、つまり平安時代中期の住居址と想定できる。

遺物（第5図）

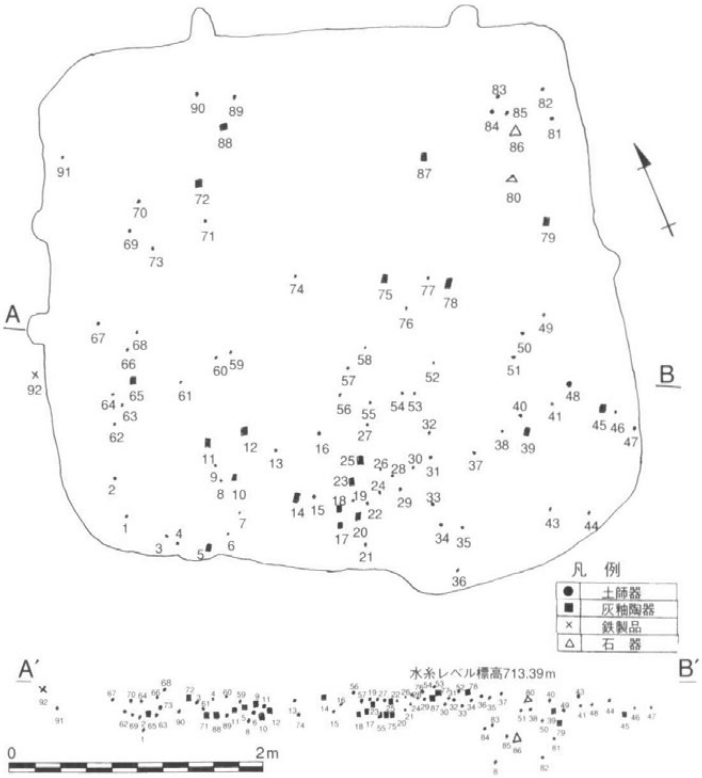
第５図の1は底部の一部が残っているだけの土師器坏である。図上復元より底径は6.2cmを測る。底部残存破片に回転糸切り痕が明瞭に見える。内・外面ともに赤褐色を呈し、焼成は良好で、雲母粒を多量に含み、ピカピカ輝いていた。2は残されている破片の状態からみて土師器高台付坏の高台部分であり、この断面はややハの字状に開いており、この時期の特徴をよく現出させている。図上復元ではあるが、坏の体部の底径は9.9cm、高台部分の底径は7.8cmを測る。明茶褐色を呈し、焼成は極めて良好で、堅く焼きしめられている。微量の雲母粒を含み、胎土の状態が分かる。ロクロ痕の調整がよくゆきとどいている。

3は図上復元ではあるが、口縁径18.4cmを測る土師器鍔釜の口縁部破片であり、口唇部はわずかに外そぎ状態であり、口縁部全般はやや外傾気味である。口唇直下3cm程度の位置に幅

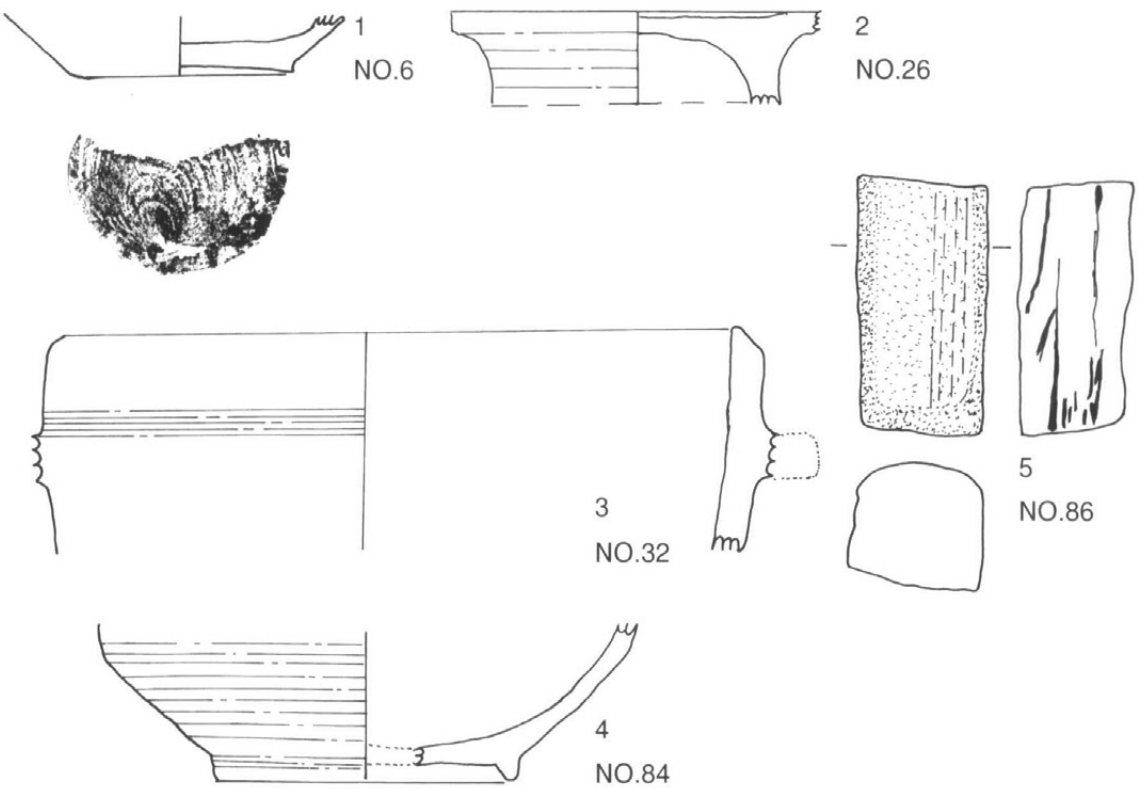
1cm位、高さ1.3cm位の鍔を横位に整然と配させてあったと思われるが、発掘時点では鍔の上面は剥落してゴツゴツ状態であった。赤褐色を呈し、焼成は良好、雲母粒を含んでいる。

4は土師器坏で、口縁部は欠損している。胴部・口縁部ともやや外反し、坏の面目を保っている。外面に丁寧なロクロ痕が残る。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。

5は砂岩製の携帯用の砥石である。上部・下端部は岩石の節理面によって欠損してしまっている。自然面が大部分であるが、部分的に磨いた痕跡を認める。農耕具の研磨に使用したと想像される。



第４図　第１号住居址出土遺物分布図



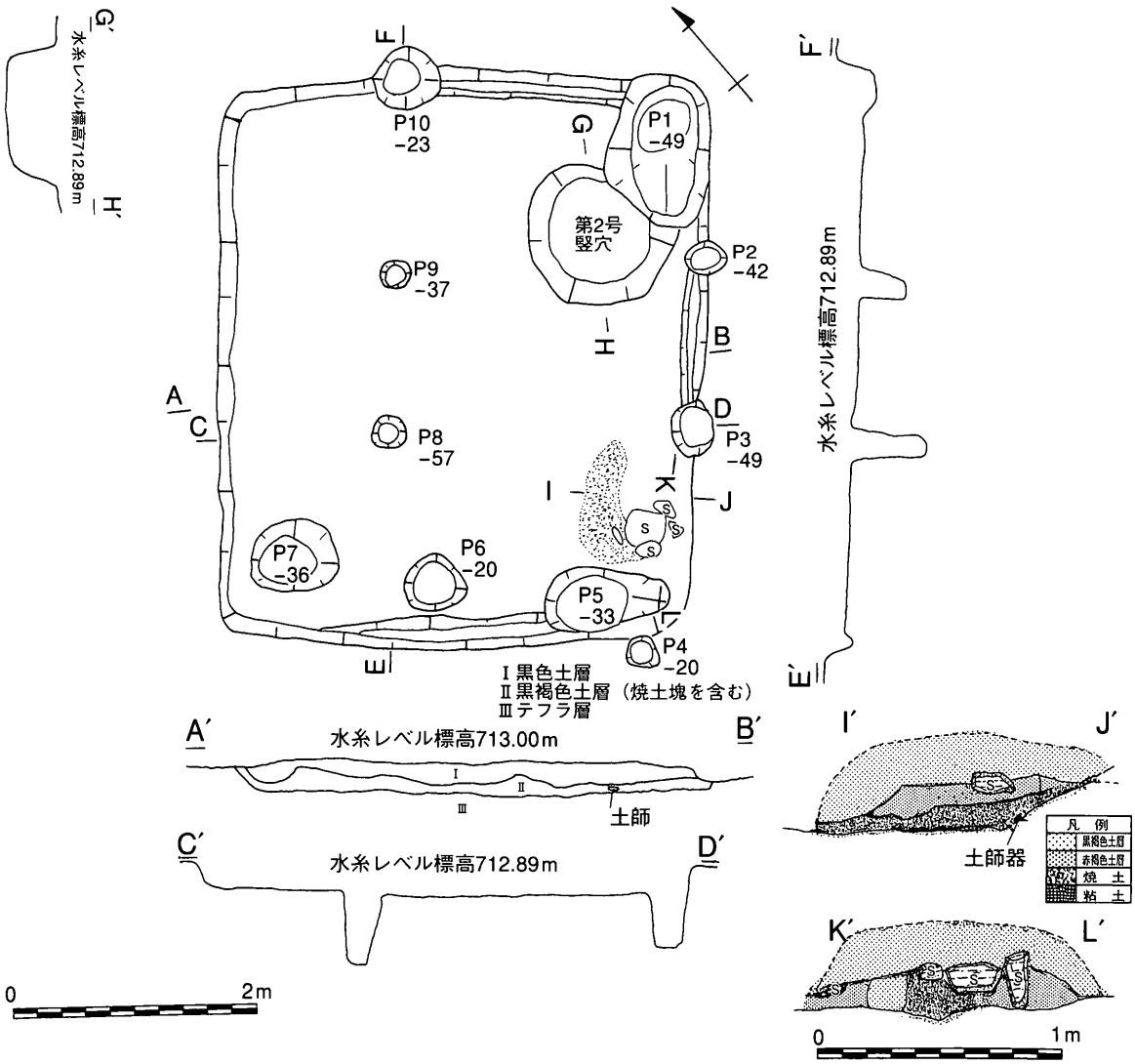
第５図　第１号住居址出土遺物実測図（1：2）

第2号住居址（第6～7図　図版2～3）

本址は西側で第１号住居址と近接した位置に発見され、表土面から40cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築し、プランは隅丸方形状で、竪穴式の住居址である。規模は南北4m70cm位、東西3m95cm位を測り、壁高は西が高く、南、東が低く、それらの数値は40cm～10cm位の範囲に留まった。壁面はやや外傾気味で、凹凸が多かった。

床面は大般に平坦で、東側半分は堅く叩いてあったが、西側半分は軟弱気味を呈していた。柱穴は10本検出されたが、そのうち、主柱穴になりそうなのはP1、P5、P6、P10で、P2、P3は母屋柱的機能を、P8、P9は間仕切的な用途をそれぞれ保持していると思われる。

竈は第１号住居址と同様に南東隅の壁面に密着した状態で構築され、ホルンフェルスを利用した石組粘土竈であったが、後世の撹乱によって、その残存度は極めて貧弱であった。竈をたち割って見たところ、煙道が明瞭に判別できるように焼土が帯状に走り、火力及び煙の強さが想像できた。



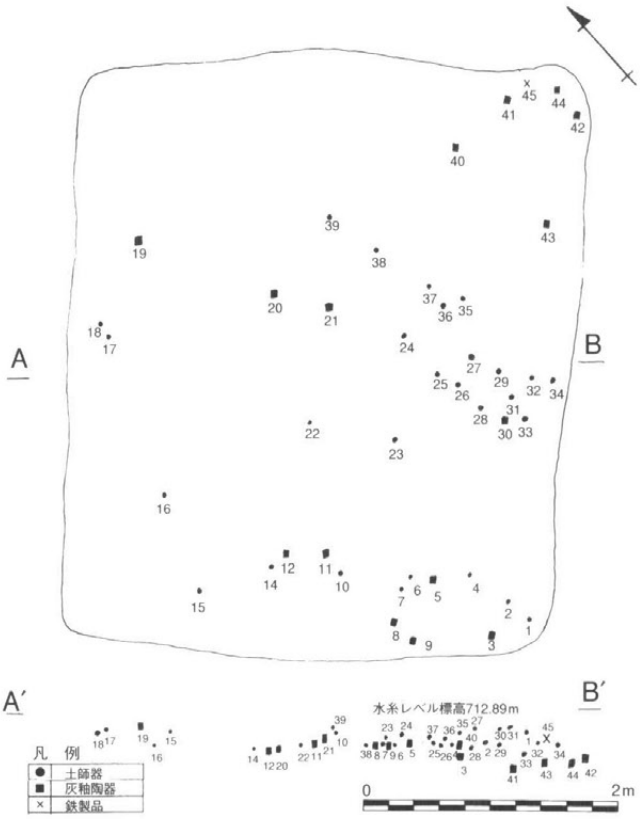
第６図　第２号住居址・第２号竪穴実測図・第２号住居址竈断面図（左下）

出土遺物の土師器、灰釉陶器からみて、本址は11世紀代、平安中期頃に位置づけられると思われる。

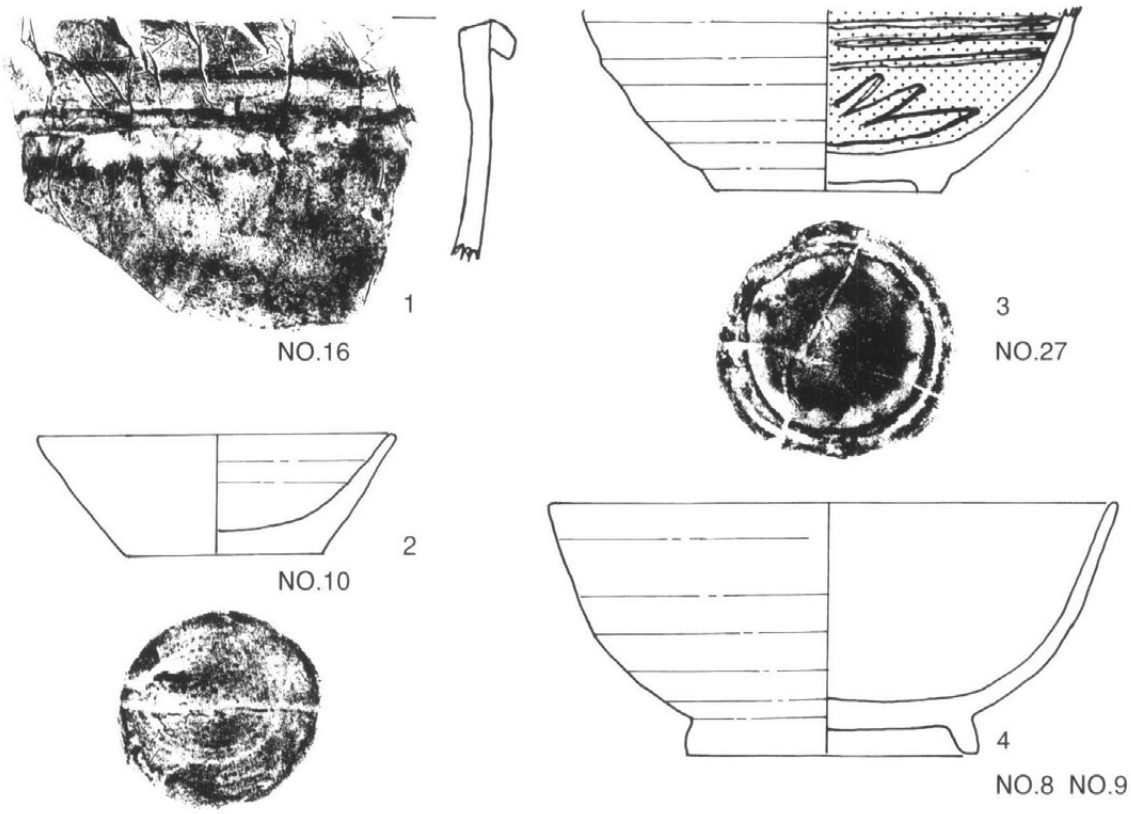
遺物（第8図）

第８図の1は土師器鍔釜の口縁部破片で、2は土師器坏で、2は口縁径9.9cm、高さ3.4cmを測る。胴部は直線的で、口縁部はやや外反する。回転糸切り底の様相を成し、焼成は良好である。3は高台の低い、高台付坏であり、口縁部は欠損しているが内黒で研磨され、暗文を施してある。外面のロクロ痕は顕著で、丁寧に出来上がり、極めて堅い焼きしめ状態である。

4は高台付灰釉陶器碗であり、やや外反し、ややハの字状に開く低い高台で、施釉状態は希薄である。やや黒っぽい胎土であり、猿投方面の産地と考えられる。



第７図　第２号住居址出土遺物分布図



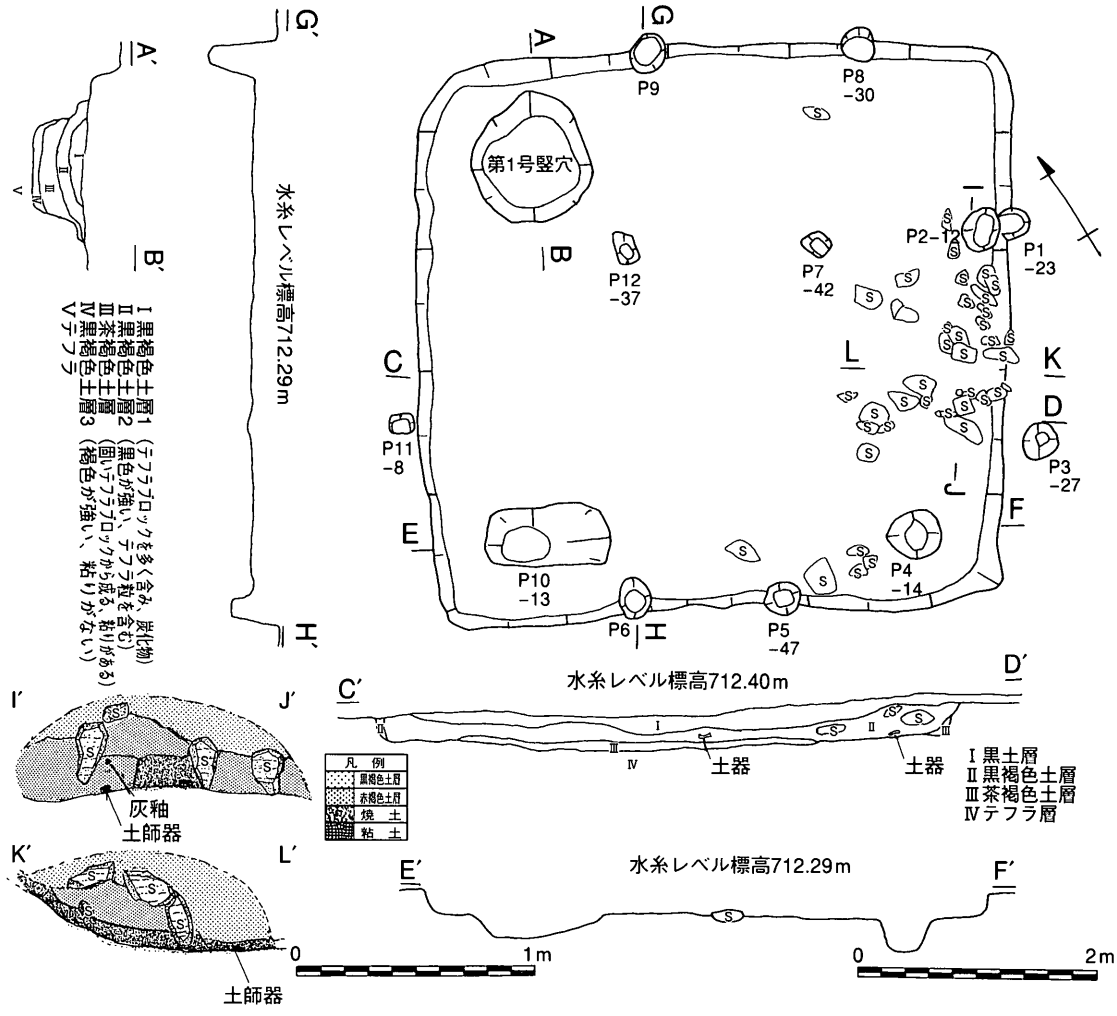
第８図　第２号住居址出土遺物実測図（1：2）

第3号住居址（第9～10図　図版2～3）

本址は西側で第２号住居址と近接した位置で、しかも単独状態の姿で検出され、耕土層は20cm位、その下に数cmの水田地場層が存在し、さらにその下層のソフトローム層面を掘り込んで構築した隅丸方形状プランを成す竪穴住居址である。その規模は南北4m65cm位、東西4m95cm位が測定可能である。壁高は20～30cm内外を測り、その状態は外傾気味で、やや凹凸を認めた。

床面は全般的に堅く叩いて造ってあったが、凹凸の状態が目立った。床面上及び壁面に接して12ヶ所のピットの存在が確認されているが、その内、主柱穴になりそうなのは床面上のP12、P4、P10であり、P1、P3、P5、P6、P11、P8、P9のようなのは、その配列状態から母屋柱的な色彩が濃厚と思われる。第１号竪穴を覆うようにして先に述べたように厚く、硬い貼床をして、本址の床面に利用していた。P7、P12、P2は割合に直線状に並んでおり、しかも小ピットである点より、間切り的な柱を埋め込んだのではないか。

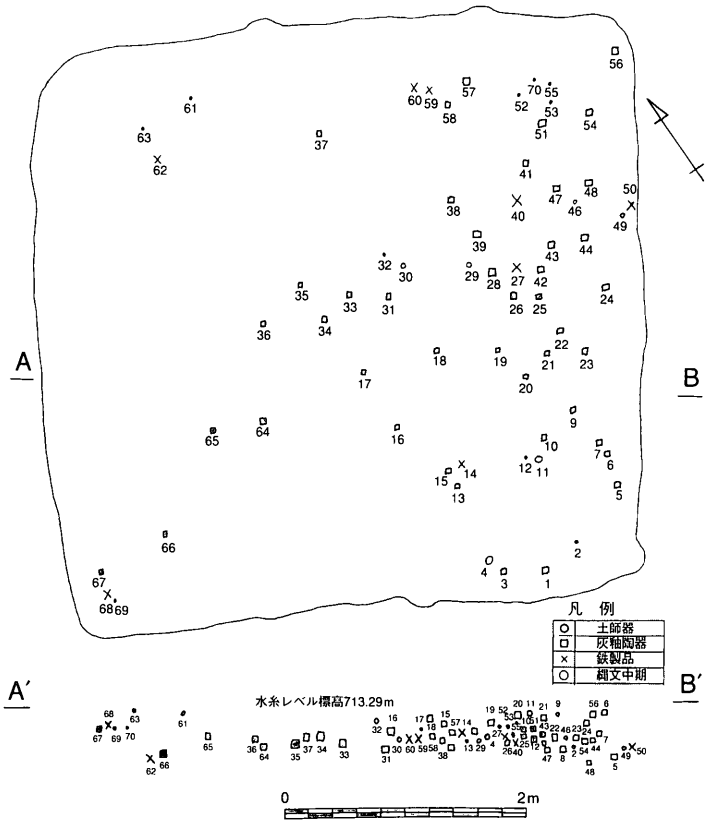
竈は東壁中央部付近に南北に比較的長く構築した石組粘土竈で、残存状態はやや良好であり、



第９図　第３号住居址・第１号竪穴実測図・第３号住居址竈断面図（左下）

その為に、焚口付近に設置された両袖石はしっかりと粘土で固定され、移動せずに赤々と焼けて変色していた。竈断面図で見れば一目瞭然であるが、煙道はやや傾斜しており、この部分は多量の焼土が堆積していた。

遺物は割合に竈周辺に集中的に存在し、これから離れるにしたがって散在的となっている。土師器・灰釉陶器が出土遺物の主流を占めており、これらによって本址の構築時期は11世紀代、つまり平安時代中期頃と判明するのである。



第10図　第３号住居址出土遺物分布図

遺物（第11図　図版８）

第１１図の１は土師器坏である。内・外面はともに調整のロクロ痕がよく見受けられ、回転糸切り底を成している。2は土師器高台付坏の底部破片であり、外面は形成時のロクロ痕が認められる。高台上部はくの字状に曲折し、下部は大きくハの字状に開き、11世紀代の特色をよく表現している。

（3～4）は灰釉陶器高台付碗の口縁部破片であり、内・外面ともに刷毛で灰釉が施されている。器形は胴部から口縁部に向かって、やや外傾し、そして立ち上がり、口唇は外反している。3は付高台で、先端がやや三角状を成し、やや外へ開く、4も同じく付高台で、先端部分が鋭く尖がり、いわば三角形状高台の典型的なスタイルである。高台の状態からして、（3～4）には灰釉陶器の編年から見て若干の時期差があると思われる。

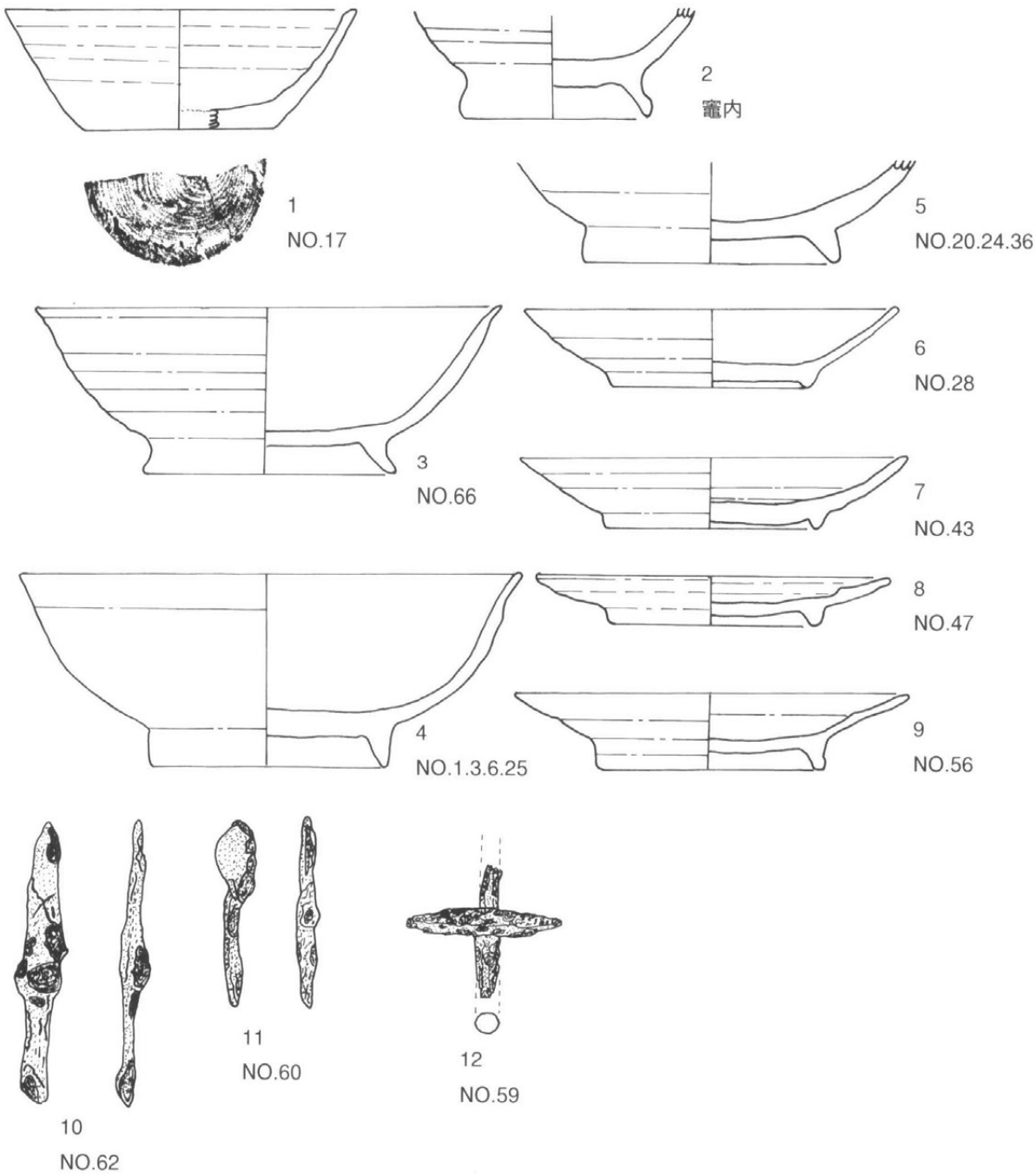
5は灰釉陶器の高付台の碗であり、底部の一部分だけが残存しているにすぎない。付高台で、高台の状態は幅広で、先端部がやや甘い三角形状高台の一種である。（3～5）の胎土はいずれも黒味がかっており、猿投産の可能性が強いと思われる。

（6～7）は付高台の灰釉陶器皿であり、二つとも底部には糸切り痕が残り、底部を除いた内外面に部分的に施釉の痕が見られる。7は口縁径13.1cm、高さ2.4cm、底径7.4cmを計る完型品であり、本住居址からは相当量の灰釉陶器の出土があったが、完型品としてはこれが唯一である。

（8～9）は付高台灰釉陶器段皿であり、口縁部は大きく外反し、その直下に大きくて、平坦な段を有している。（6～7）の高台先端部は尖り気味、8のそれはやや丸味気味、9のそれは平坦状をそれぞれ呈しており、わずかな時期差の違いかと思われる。（6～9）の胎土は黒味を帯びており、猿投の所産と考えられる。

第11図の（10～12）は鉄製品である。10は鉄鏃で、鏃身では9.5cm、下幅1.6cm、中央部では1.3cm、中茎の長さは4.1cmをそれぞれ測り、その残存状態は良好であった。11は鏃身では2.2cm、下幅0.9cm、中央部で1.2cm、中茎の長さは3.8cmをそれぞれ測り、残存状態はやや不良であった。

12は鉄製紡錘車で、棒状の先端部と下端部は腐蝕のために欠損してはいるが、このような遺物の出土は伊那市内では極めて珍しい。



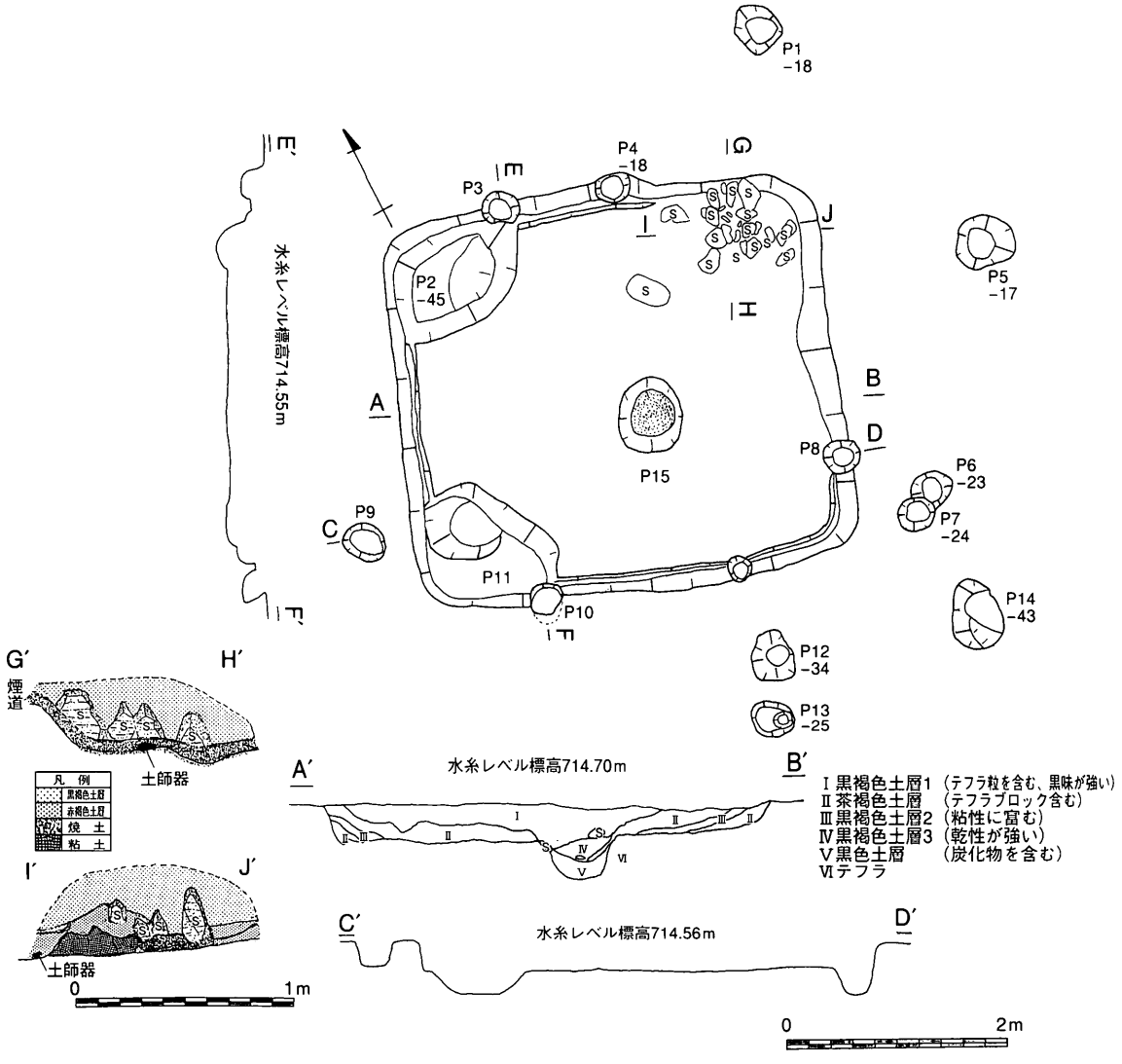
第11図　第３号住居址出土遺物実測図（1：2）

第4号住居址（第12～13図　図版2～3）

本址は前述した三つの住居址（第１号住居址～第３号住居址）とは南西へ200m程離れた地点に単独で発見され、隅丸方形状を呈し、表土面より30cm位下のソフトテフラ層面を掘り込んで構築した竪穴住居址である。規模は長・短軸がそれぞれ3m60cm程度×3m35cm程度、壁面は20～30cm内外をそれぞれ測る。壁面は外傾気味で、軟弱状態であった。床面は大般に平坦で、堅い叩き状になり、極めて良好な状態。同面上の南側から西側を経て、北側の西半分に至る範囲内に幅20cm位、深さ10cm前後の周溝が廻っていた。

竈は北東隅の位置に石組粘土竈の工法にて構築され、中心部及び両袖部分に大きな変成岩を用いて骨格部をつくり、その周囲に厚く粘土を貼り付けてあった。そのため、今回の発掘調査では竈の側壁や袖石、煙道、焚口の残りは良好であり、その構築方法が分かった。

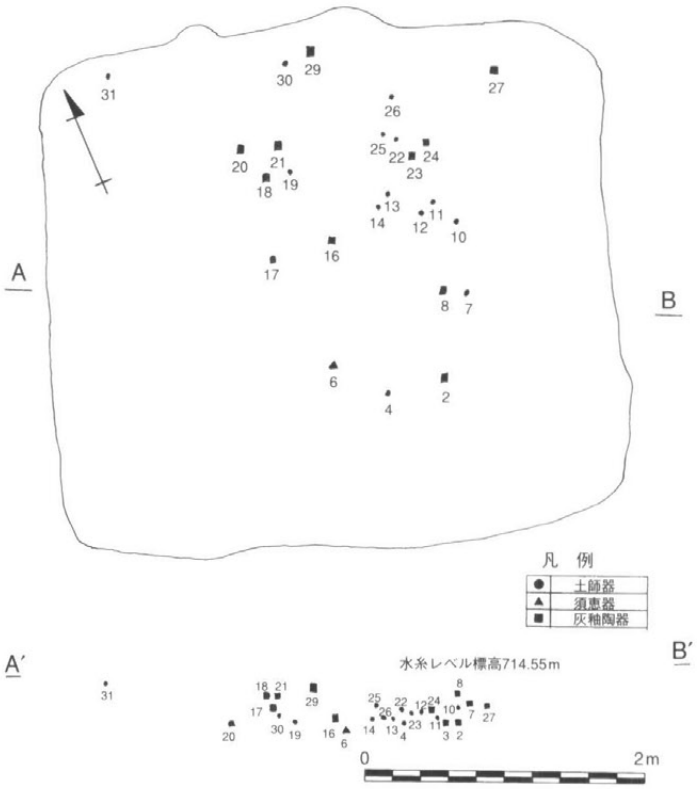
住居址の中央部付近に検出された大穴（P15）の中に多量の焼土が充満しており、おそらく竈から掃き出した灰の捨場に利用されたのであろう。



第12図　第４号住居址実測図・第４号住居址竈断面図（左下）

ピットは15ヶ所検出されたが、そのうち主柱穴になりそうなのはP2、P11、P9、P8であり、母屋柱的な柱穴はP3、P4、P10、P15である。東壁の上面から、南と北に展開する柱穴群（P1、P5、P6、P7、P12、P13、P14）は本住居址に関連する付属施設があったのであろうか。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、これらから見て、本址は平安時代中期頃、つまり11世紀代の所産と判明した。他の３つの住居址からは須恵器の出土はなかったが、本址からの出土は注目すべき問題点である。



第13図　第４号住居址出土遺物分布図

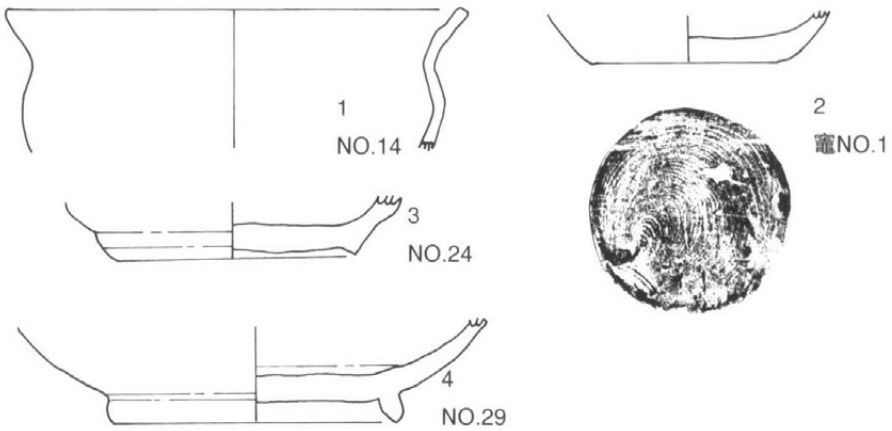
遺物（第14図）

第14図の1は土師器小型甕の口縁部破片であり、残存した破片から図上復元をこころみると口縁径14.4cm位を測る。器厚は5mm程度と極めて薄い出来上がりである。口唇部はやや外そぎで大きく外反し、口頸部に至ってくの字状に折れ、胴部最上端で膨らみが極大値に達する。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母粒を含む、内面に多量の炭化物が付着している。

2は竈内より出土した土師器坏の底部破片である。回転糸切り痕が明瞭に見られる。赤褐色を呈し、焼成は良好、少量の雲母粒を含む。

3は灰釉陶器碗の底部破片であり、内・外面ともに灰釉の状態は希薄である。付高台で、やや低目である。回転糸切り底を成し、産地は美濃の光ヶ丘か。

4は付高台灰釉陶器碗の底部破片であり、内・外面ともに若干の灰釉が施されている。黒味がかった胎土が破片より分かり、よって猿投産と察せられる。

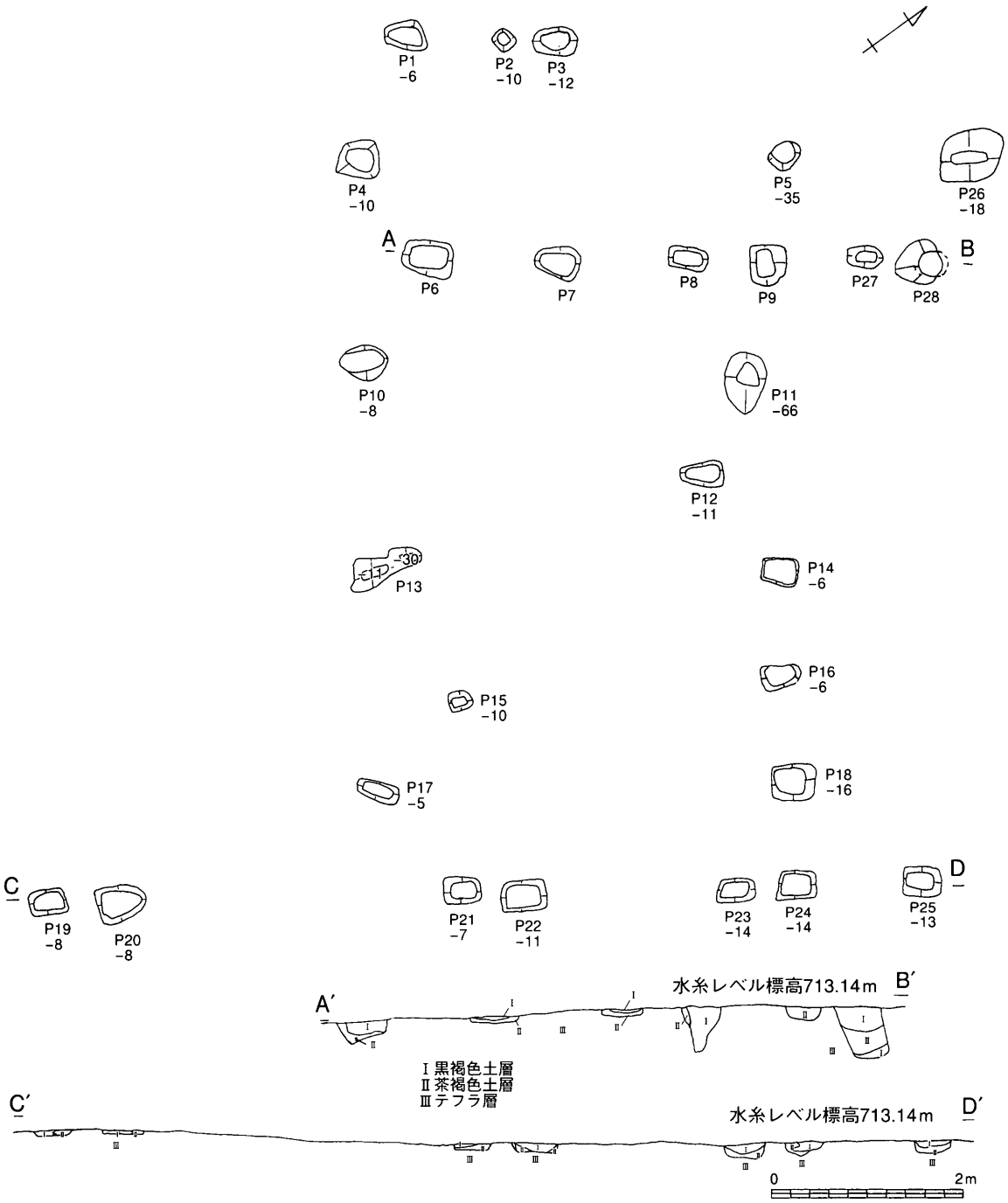


第14図　第４号住居址出土遺物実測図（1：2）

(3) 時期不詳の遺構

第1号柱穴群（第15図　図版4）

本柱穴群は第１号住居址と第２号住居址の中間地点に分布していることが確認された。柱穴の検出された面までは表土面から30cm位と浅かった。この30cm位のうち、上の20cm位は耕作土、下の10cm位は水田造成時に堅くしめて造り上げた地場層であった。掘り下げていき、



第15図　第１号柱穴群実測図

地場層を取り除くと同時に柱穴の落ち込み面が検出でき、新しき時期の柱穴群と思われたが、正確な時期は遺物の出土が全くないために不詳である。

本柱穴群は南北9m位、東西9m位、面積80㎡位の範囲内に存在し、それらの形状は方形状であった。柱列の配置状況はP6、P7、P8、P9、P27、P28は東西に、P17、P13、P10、P4、P1は南北に、P5、P9、P12、P14、P16、P18は南北にそれぞれ直線上に配列してある。

南側では東西に配列してあるP19、P20、P21、P22、P23、P24、P25は同一線上に配列してある。これらのうちP19とP20は、P21とP22は、P23とP24はそれぞれ接近して二つの柱穴が検出され、建築学上、何を意味するか、今後の検討課題である。前述した配列状態は東西南北で四グループに大別されており、総体的に四つの仕切りに囲まれ、入口が南側にある建造物になるのであろう。

第15図の中でセクション図に掲載してない柱穴の規模を羅列しておく。P1は25㎝×40㎝、P26は20㎝×22㎝、P3は25㎝×42㎝、P4は33㎝×35㎝、P5は25㎝×28㎝、P10は31㎝×41㎝、P11は54㎝×38㎝、P12は21㎝×39㎝、P13は29㎝×64㎝、P14は23㎝×34㎝、P15は18㎝×23㎝、P16は19㎝×42㎝、P17は18㎝×40㎝、P18は33㎝×42㎝。それぞれの柱穴の深さは第15図を参照して下さい。

第2号柱穴群（第16図　図版4）

本柱穴群は第4号住居址の南側に検出されたが、柱穴群らしき部分と、木の根らしき部分とが判然とせず、苦慮した次第である。よって、発掘調査によって知りえた事だけを記しておく。全般的に見て、東側は柱穴群の可能性は強いと思われる。これらをよく見てみると、柱穴の穴自体が単純化しており、美しく掘られている。

第16図より、これらを抽出して列記しておくことにする。P6、P17、P20、P29、P25、P43、P30、P31、P32、P35、P36、P37、P38、P39、P40、P41、P42。これらのうち、P36～P42にかけては、直線状に近い形態で配列されており、何か木柵状の遺構の可能性を示唆してくれる。遺物の出土は何も無く、従って、時期は不詳である。

中央部から西側にかけて検出された不整形の大きな穴、これらの底面及び壁面に小さな穴があり、木の根が混入していき、強風によって木が倒れ、時間が経過して、木が腐敗した後に、出来上がったピットではないだろうか。このことは、近年、よく提唱されている風倒木の残がいの跡ではないだろうか。近くの古老達に西天竜開田事業以前の土地利用状況を、特に森林地帯の広がりを聞いてみる必要性が生じてくるのである。

第1号溝状遺構（第17図　図版4）

本遺構の命名の仕方であるが、溝と柱穴列は一体化しているので、溝状遺構を中心に考えて、このような命名方法を採用したが、一抹の疑問が残る。

本遺構は表土面から40cm位下がったソフトテフラ層を掘り込んで構築されてあり、その範囲は南北14m50cm程度、東西7m80cm程度に及んでいる。西側には最大幅1m30cm位、最小幅85cm位、長さ7m50cm位で、深さ20cm内外の溝状遺構が長蛇の如くに南北に走っている。

この溝状遺構の壁面はやや外傾気味で、底面は堅くなっていた。壁面及び底面には無造作に無数のピットが穿けられており、柱穴列よりも杭状の遺構ではないか。つまり木柵列が並んでいたのではないか。東側の壁面に沿って、さらにある程度の間隔をおいて、ピットが南北に2条にわたって規則的に配列されている。これは、まさしく柱穴列の判断が可能である。

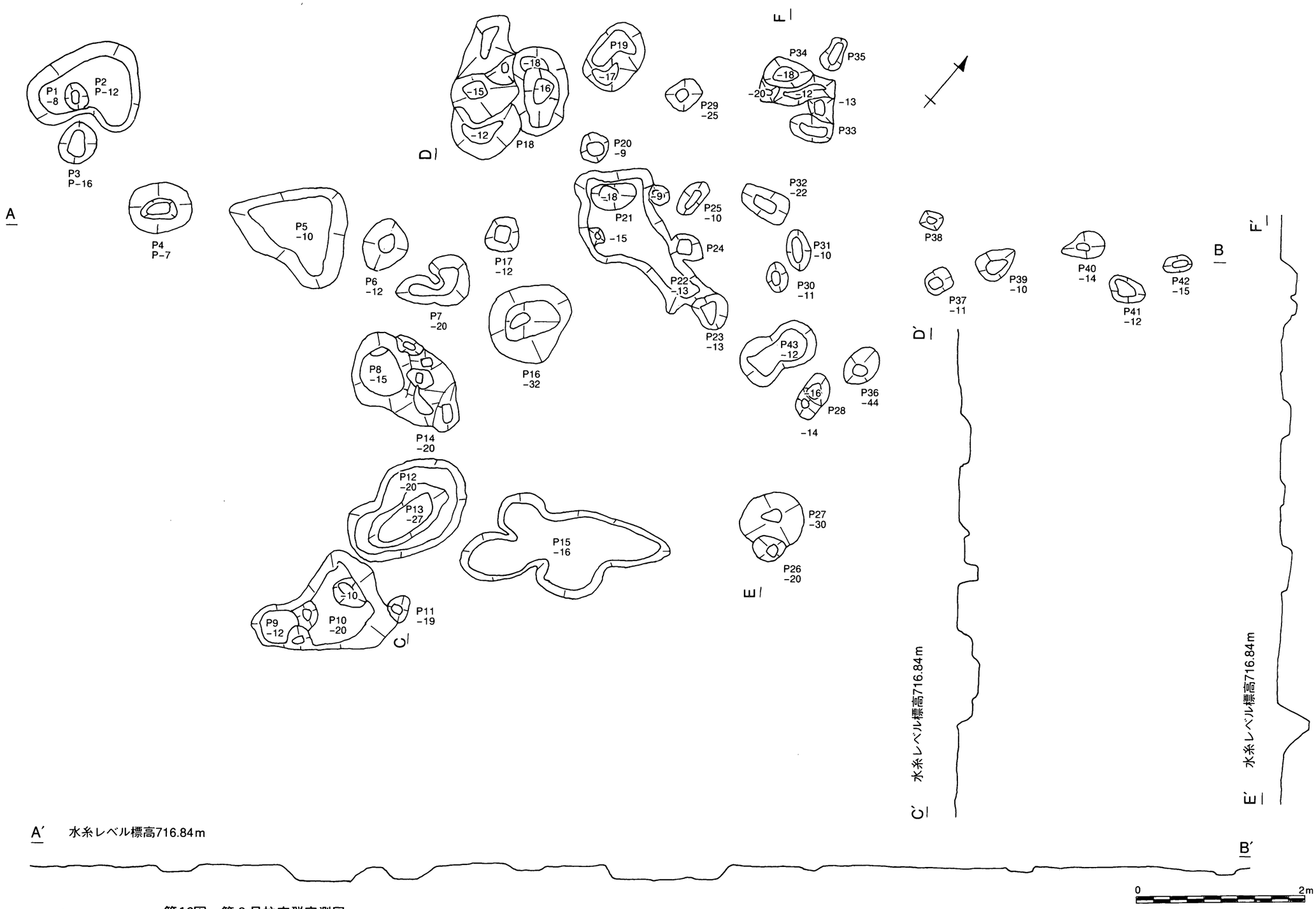
溝状遺構内及びその周辺に検出されたピットの内で、不整形のものは風倒木によって出来上がったものと考えられる。

本ピット及び柱穴内の覆土は撹乱土層によって充満しており、一時期に人為的に埋められた可能性が強いように思われる。人為的に埋めた時期は西天竜土地改良事業時であっただろう。

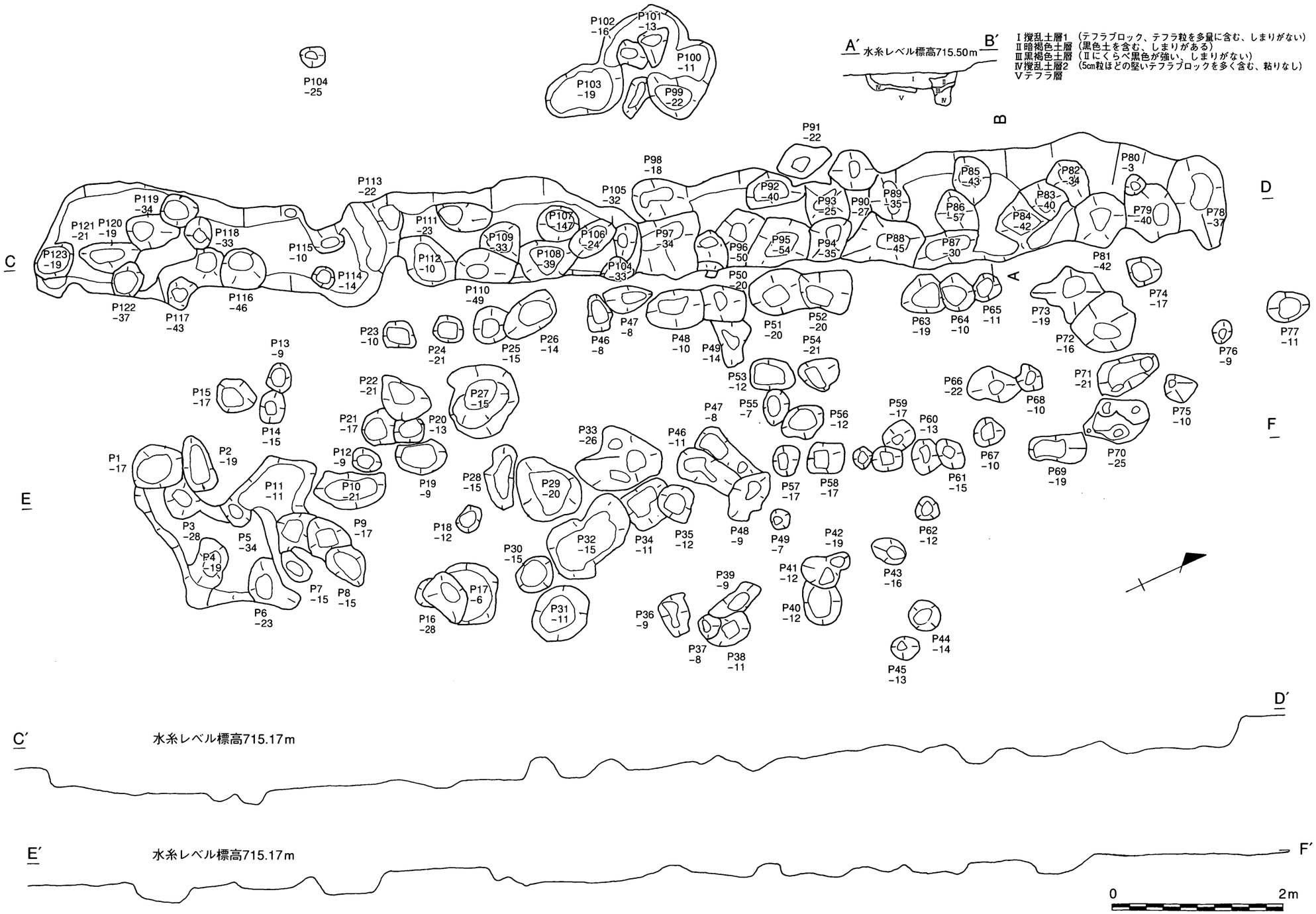
遺物は縄文中期土器の細片が数ケ出土したが、前述したように撹乱土層が多く充満しており、ここの土器片が本遺構に直接的に結び付くかは多くの疑問が残る。

この土器片については摩耗が多く、器面が剥落していて、拓影をこころみても、文様の変化は表現できないので、掲載しなかったが、発掘担当者が実見したところ、その厚さ、胎土の状態から察して、縄文中期土器片と判別が可能であったことを付け加えておく。前述したように、この土器片はどこからか運び込まれたのであり、よって、本遺構の時期決定は出来ないと言わざるをえない。

（飯塚政美）



第16図　第２号柱穴群実測図



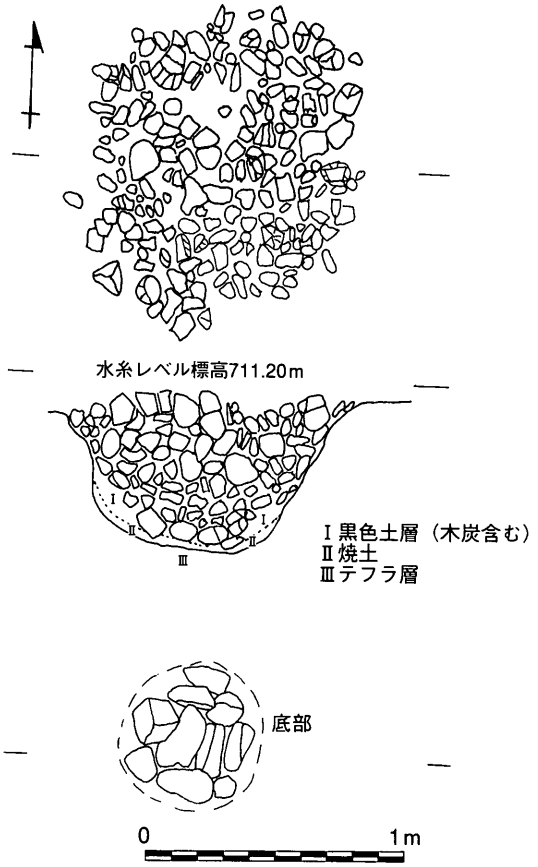
第17図　第１号溝状遺構実測図

第1号集石遺構（第18図　図版5）

本遺構は遺跡地の中央部付近を東流する「小四郎窪」の北側で南傾斜面の先端部に位置している所より検出された。検出時点での集石の規模は1.2m×1mで、その中に、大きな石であっても拳大から、それよりも小さな自然の礫が無造作に並べられていた。

単なる集石址と思われたが掘り込むにつれて穴状となり、その中に礫が充満していた。穴の底部には大きな平坦な石を中心にして放射状に意識的に配石されていた。

本遺構内の礫はこの台地、川周辺に点在している変成岩系の礫がほとんどであり、その総数は850個位を数え、そのうち丸石状態を呈するのは20個であった。



第18図　第１号集石遺構実測図

穴の底部に置かれた丸石等は火を受けたり、一部は火により割れたのも見られた。穴の底部辺の壁面は焼土化している。穴の下方部の壁面は粉状炭化物が付着しており、一部は焼土化している。周囲の礫群はやはり粉状炭化物が付着しているが、火を受けた形跡は見られないが、底部に近い礫は一部火を受けている。中・上部の礫群は黒土に混じって検出されているが、火を受けた形跡はない。

この遺構は穴を掘り、底部を敷石により安定させて物品を燃焼させ、その後、周辺の礫を投げ入れて、平らにしたものと思われる。

遺物が検出されず、遺構の用途、製作時期も不明であるが、構築されてある地形上から、また、炭化物の出土量の多さから見て、江戸時代～明治初年頃の隠坊（亡）焼の跡ではないかと言う説もある。

何れにしろ、西天竜開田事業時のことを詳細に調査しなければならない。隠れた証拠を追い求める最良策は生証人を捜し続け、その人からの事情聴取を実施することである。

（本田秀明）

第Ⅲ章　所　　見

前述したように伊那中央病院建設事業に伴って今回、緊急発掘調査が実施された石塚遺跡が世に知られるようになったのは大正末年、上伊那郡教育会が中心になり、来伊した鳥居龍蔵博士が上伊那郡内全域をくまなく調査して、大著『先史及原史時代の上伊那』を出版された以後からである。博士はこの本の中で、石塚遺跡より出土した土器を厚手の「アイヌ式土器」と呼んでいる。この土器はおそらく、縄文中期の土器と思われる。アイヌ式土器の名は考古学研究史の上で、大正末年から昭和初期にかけて精力的に使用され、これに付随して、日本民族の先祖はアイヌ人であったのではないかとの説が活発に提唱されていた。時代が時代だけであったために、今回、出土した灰釉陶器類については全く触れていない。前置きはこのくらいにしておいて、今回の成果について簡略的に述べてみる。

平安時代中葉頃、つまり11世紀代の竪穴住居址は第1号～第4号の4軒、時期不詳の柱穴群が2棟、同じく時期不詳の溝状遺構1基、時期不詳の集石遺構1基。縄文中期の竪穴2基がそれぞれ検出された。

4軒の竪穴住居址は全て、隅丸方形状を呈し、その規模は第4号住居址を除いた他の3軒は一辺が4m～5m内外に含まれ、中型程度であった。一方、第4号住居址は一辺が4m以下の数値で、小型の部類に属すると思われる。次ぎに住居址の主流を成す柱穴と竈の存在について考えてみる。4軒とも床面上に存在する主柱穴に対比して壁面近くに母屋柱的な柱穴の存在が顕著であった。第3号住居址を除いて、竈の存在は隅丸方形状のコーナーに築かれており、なぜ、このような位置にあるのはいかにも不可思議である。この発掘調査地点から西へ50m位行った辺が「令制東山道」の通過地点との説が盛んに提唱されており、これとの関連性も今後、考えてみる必要性が生ずるであろう。

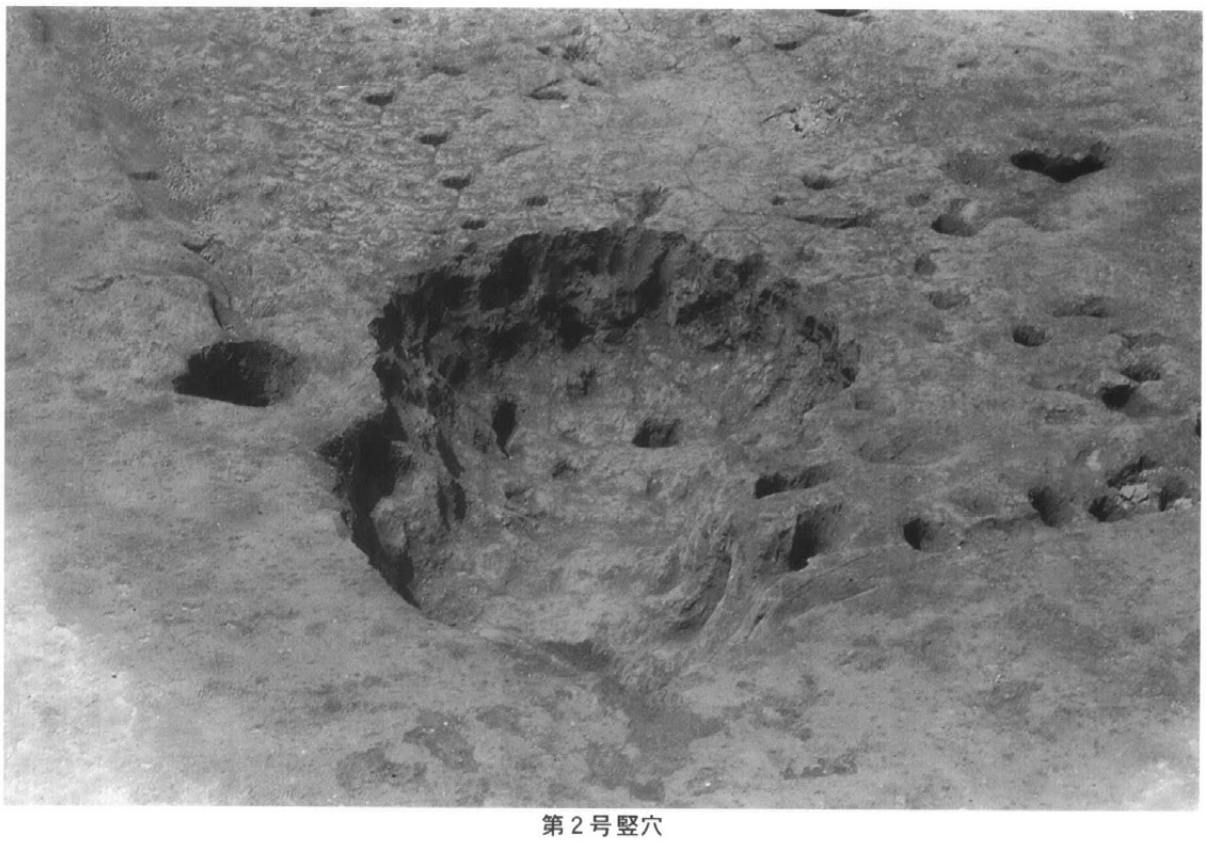
時期不詳の柱穴群、多くの柱穴を伴う時期不詳の溝状遺構についての考察を加えてみよう。この遺跡から沢を隔てた一帯は「牧ヶ原」と呼ばれている。この名は周知の通り、かつての放牧地の名残りであり、このことを踏まえてみると、あるいは放牧した馬を一時期的に囲った柵状遺構の跡ではないだろうか。今後、多くの類例の発見とともに解明されてくるであろう。縄文中期の竪穴2基は今まで検出されたのと類似点が多かった。

遺物は縄文中期前葉の梨久保式土器、縄文中期中葉の井戸尻式土器、縄文中期後葉の曽利式、縄文中期石器、平安時代中期頃の土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄鏃、鉄製紡錘車が出土している。なかでも第3号住居址出土の鉄製紡錘車は今までに、伊那市内では数点の出土例が報告されているだけであり、極めて貴重品の一つに数えられる。灰釉陶器はその胎土から見て、全て愛知県の猿投産であり、「令制東山道」を通ってはるばる伊那の地に運搬されたのであろう。　（飯塚政美）

図　　版

図版1　遺構

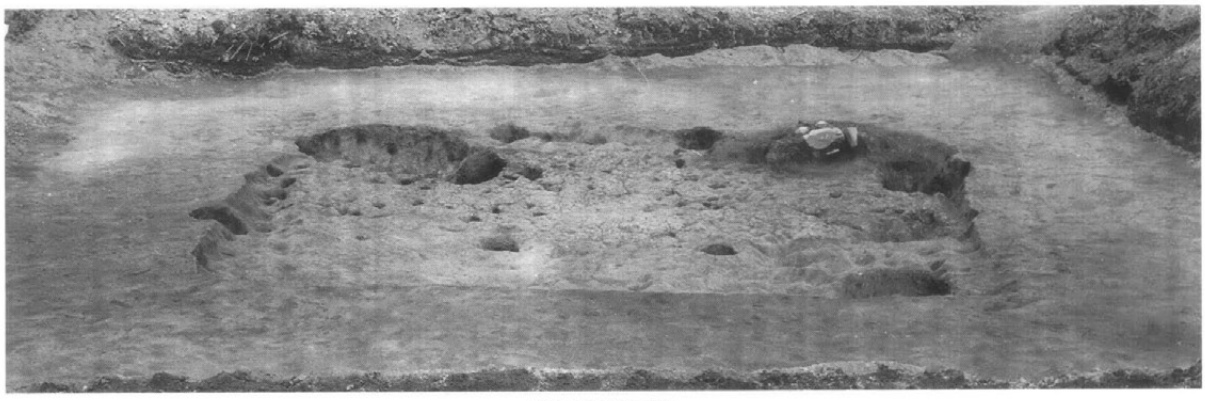
第1号竪穴



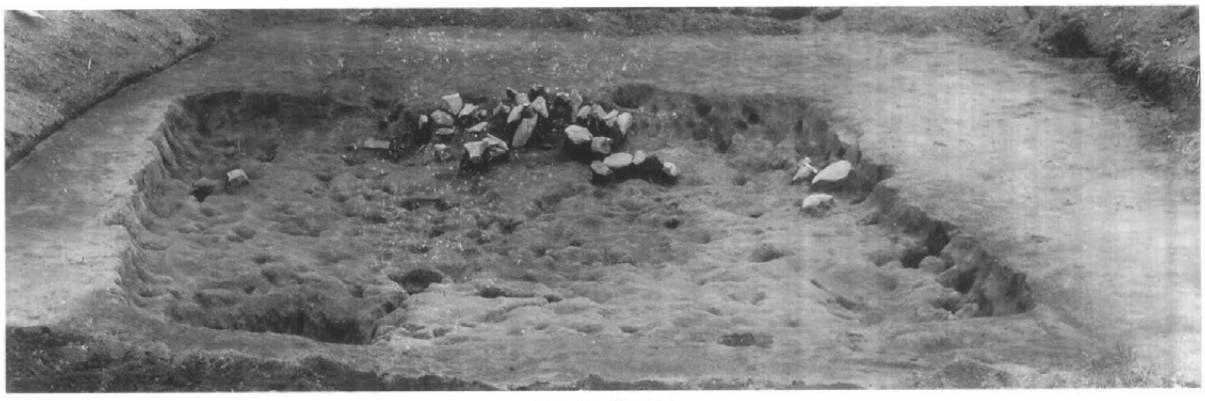
第2号竪穴

図版2　遺構

第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址

第4号住居址

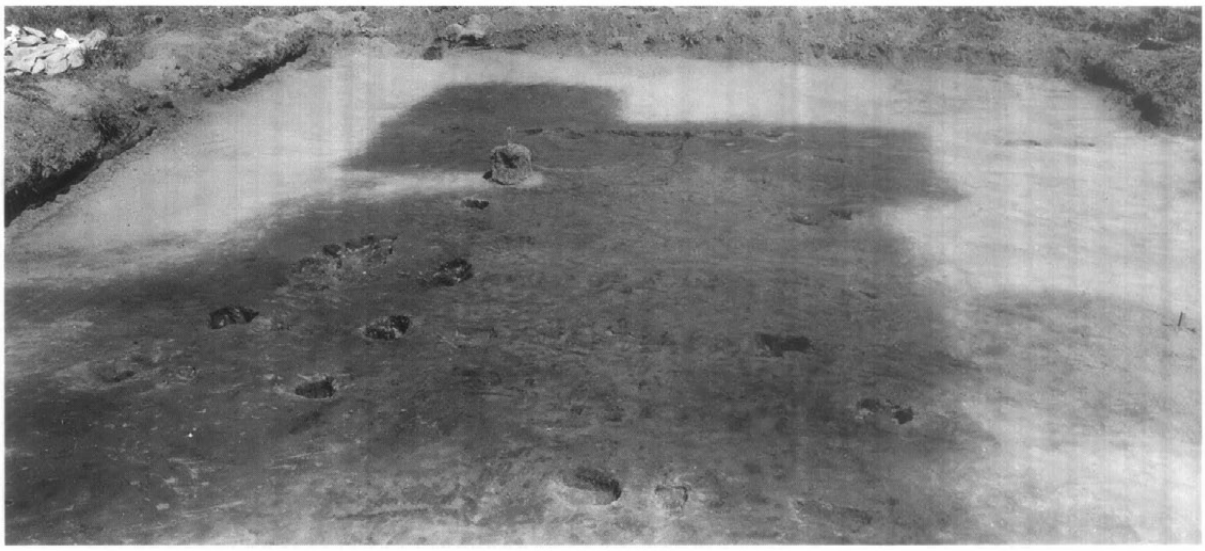
第1号住居址竈

第2号住居址竈

第3号住居址竈

第4号住居址竈

図版4　遺構



第１号柱穴群

第２号柱穴群

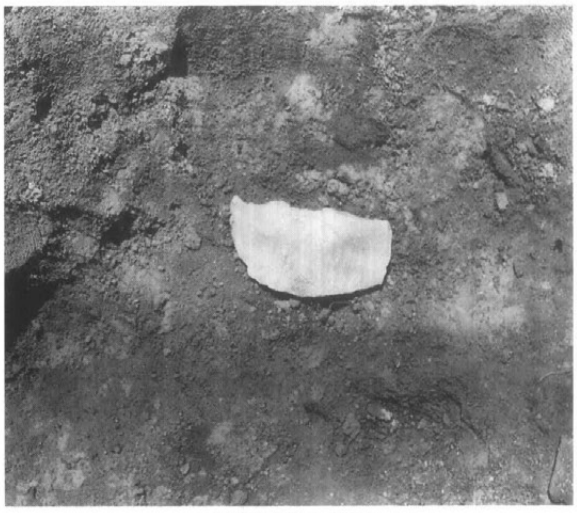
第１号溝状遺構

第１号集石遺構の上面

第１号集石遺構の底面

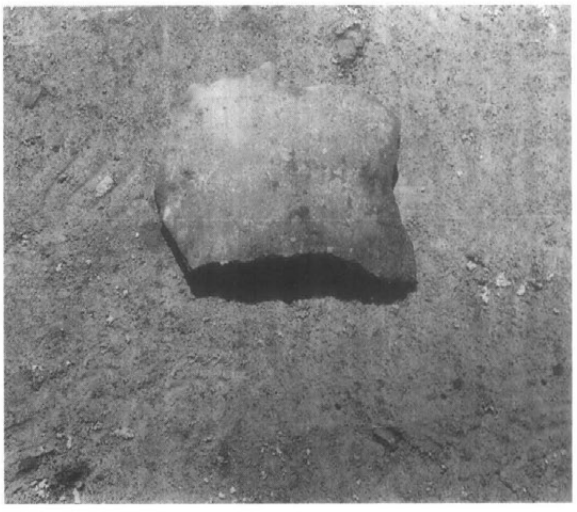
図版6　遺物出土状況

土師器出土状況



土師器出土状況

土師器出土状況



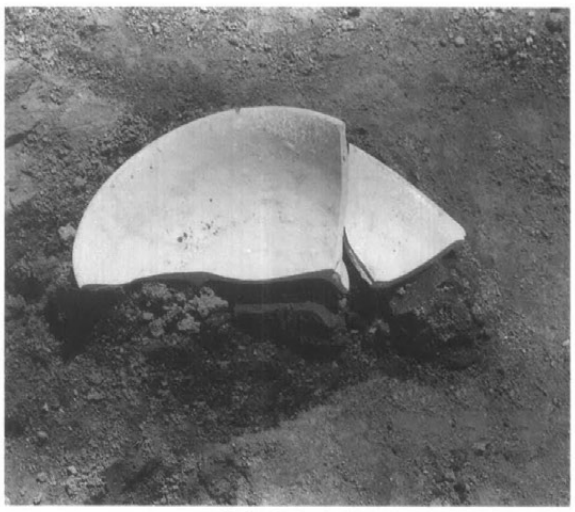
土師器出土状況

土師器出土状況

土師器出土状況

図版7　遺物出土状況

灰釉陶器出土状況



灰釉陶器出土状況

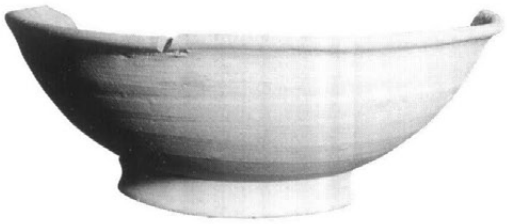
灰釉陶器出土状況

灰釉陶器出土状況

灰釉陶器出土状況

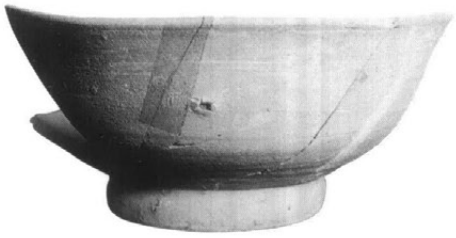
鉄製紡錘車出土状況

図版8　出土遺物

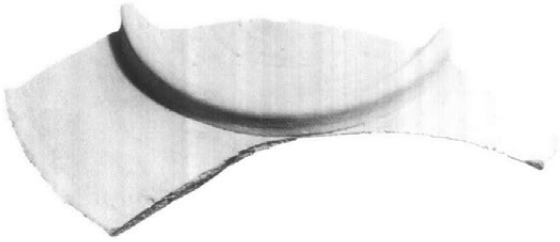


灰釉陶器（第3号住居址）

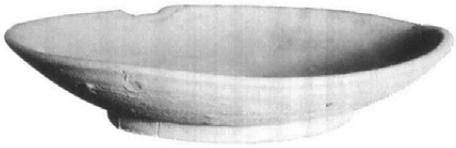
灰釉陶器（第3号住居址）



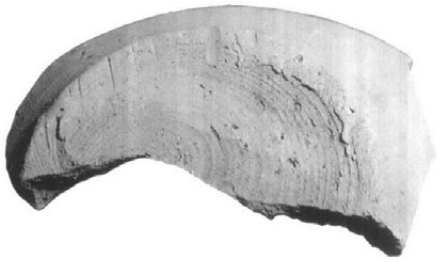
灰釉陶器（第3号住居址）



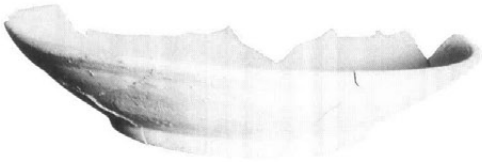
灰釉陶器（第3号住居址）



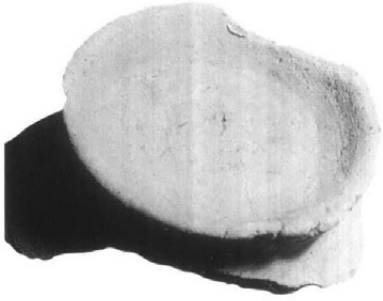
灰釉陶器（第3号住居址）



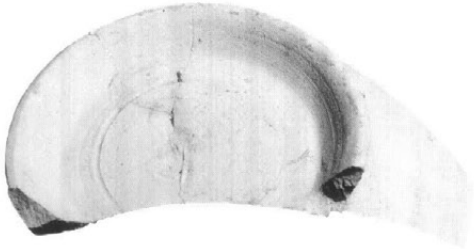
土師器（第3号住居址）



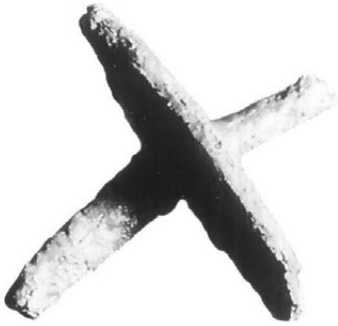
灰釉陶器（第3号住居址）



土師器
（第3号住居址）



灰釉陶器（第3号住居址）



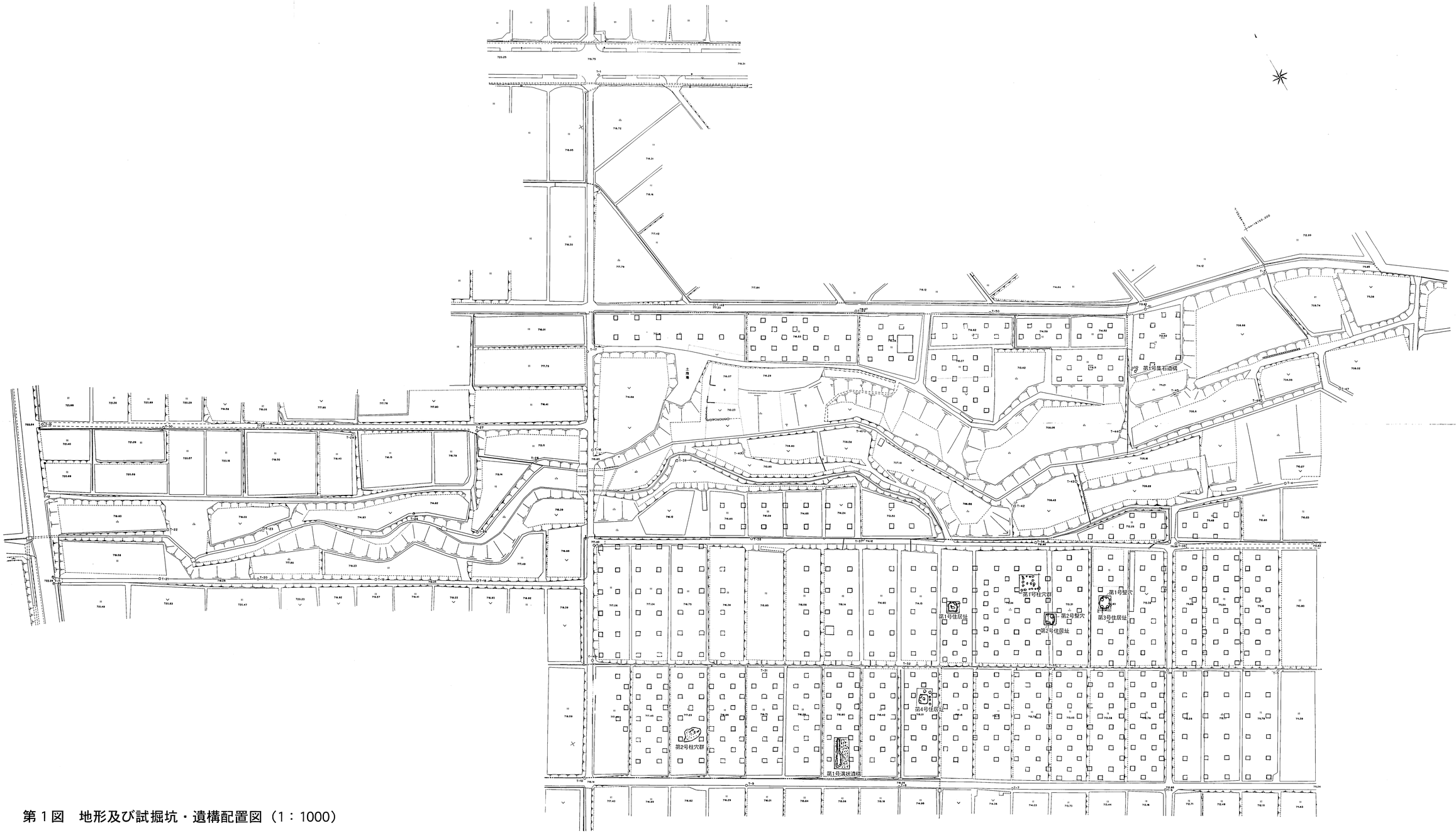
鉄製紡錘車
（第3号住居址）

報告書抄録

ふりがな	いしづかいせき
書名	石塚遺跡
副書名	伊那中央病院建設事業
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書
編著者名	友野良一　飯塚政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地　TEL0265－78－4111
発行年月日	西暦2000年1月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
石塚（いしづか）	長野県（ながのけん）伊那市（いなし） 伊那（いな）御園（みその）・山寺（やまでら）	伊那市	40			平成11年4月2日 ～ 平成11年6月4日	12,000	伊那中央病院建設事業に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石塚	集落址	縄文時代 平安時代 江戸時代	竪穴住居址　4軒 竪穴　2基 柱穴群　2棟 集石遺構　1基 溝状遺構　1基	縄文中期土器 縄文中期石器 平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器 平安時代鉄製紡錘車	試・発掘調査を実施した面積は約5haであり、住居址4軒の検出はあまりにも散在的であった。



第１図　地形及び試掘坑・遺構配置図（1：1000）

石　塚　遺　跡

埋蔵文化財包蔵地緊急試・発掘調査報告書

—伊那中央病院建設事業—

平成12年１月25日　印　刷

平成12年１月28日　発　行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　伊那市　㈱小松総合印刷